

宝暦治水工事と〈聖地〉の誕生

The Horeki riparian works and the origin of the holy place

名古屋大学大学院文学研究科
Nagoya University, Graduate School of Letters

羽 賀 祥 二
HAGA, Shoji

はじめに

名古屋大学附属図書館が所蔵する『高木家文書』は、木曾三川流域の治水を考察する根本的資料群である。この資料群の整理作業は長年にわたって地道に行われてきたし、その成果と資料を公開する試みは継続的に実施されてきた。附属図書館の研究開発室を中心に組み立ててきた資料展示会「川とともに生きてきた」は、二〇〇四年で三回目を迎えた。そして第三回目には、二〇〇四年が宝暦治水工事開始二百五十年に当たることをもって、「宝暦治水の虚像と実像」というたいへん重要なテーマが設定された。

しかし実のところ、宝暦治水工事とそれに尽力した薩摩藩士のどんな事柄が「虚像」で、何が「実像」なのだろうか。本稿では主として、薩摩藩士に関する「虚像」の形成のプロセスについて、あるいはその事績が誇張され、顕彰されなければならなかった時代状況について考察を試みたいと思う。

宝暦治水工事は宝暦三年（一七五三）十二月二十五日、幕府が薩摩藩に木曾・伊勢・尾張の諸川の治水工事の助役を命じたことに始まる。幕府の総責任者は勘定奉行一色周防守正沆、その指揮のもとで、代官吉田休左衛門、美濃郡代青木次郎九郎、川通奉行高木三家、そして幕府勘定方・目付方の役人が工事の計画立案・指揮・監督を担当した。薩摩藩主島津重年は家老平田靱負正輔を総奉行、大目付伊集院十蔵久東を副奉行に任命し、役館を養老郡池辺村大牧に置いて、多額の工事費を負担して工事に着手した。第一期工事は宝暦四年二月二十七日に始まり、雪解け水によって水勢が増す夏を避け、五月二十二日にいったん終了した。この工事箇所は緊急に治水工事が必要だと判断された箇所であった。

そして第二期工事は九月二十一日に始まり、翌五年三月二十八日に終わった。そして目付牧野織部・勘定吟味役細井九助ら幕府役人による普請箇所の検分（出来栄見分）は、四月十六日に始まり、五月二十二日に終了した。その三日後の五月二十五日総奉行平田靱負は亡くなり、遺骸は京都伏見の大黒寺に埋葬された。五月二十六日には副奉行伊集院らは江戸に帰り、その帰着後幕府に工事の竣功を報告し、幕府

から関係者へ褒賞が与えられた⁽¹⁾。この宝暦治水工事は木曾三川下流域全体にわたる大がかりなものであり、美濃六郡百四十一カ村、伊勢一郡三十五カ村、尾張一郡十七カ村、計百九十三カ村に及んでいた⁽²⁾。

宝暦治水工事の歴史的検討は戦前から『高木家文書』を基本史料として、膨大な史料を利用して実証的研究がなされてきた⁽³⁾。その一方で、この治水工事では「薩摩義士」の活躍という顕彰的な側面が意図的に強調されてきた。「薩摩義士」という名で社会的な功労者として顕彰され、多くの「薩摩義士」の遺蹟が発掘され、その功績を広く表彰するために多くの記念碑が建立されてきた。それはちょうど新たな木曾三川治水工事が着工され、近代治水をめぐって画期的な段階に入りつつあった十九世紀末から始まった。そしてその結果、大規模な工事が実施された油島は治水神社・宝暦治水碑を中核として、顕彰の中心地となり、それ以来百年以上にわたって「薩摩義士」顕彰が行われる歴史空間として形成されてきたのである。油島は「薩摩義士」を顕彰するために中心的な位置を与えられた「聖地」であり、その周囲には多くの遺蹟や記念碑が、三川流域を越えた形で繋がっている。

本稿の目的は第一に、宝暦治水事業を担当した薩摩藩士の事績を顕彰する運動の様相を明らかにすることである⁽⁴⁾。そして第二に、宝暦治水事業を取りまいていた歴史的條件をふまえつつ、その「実像」について若干の問題提起することにある。

1 「聖地」としての油島

現在、宝暦治水工事の主要な工事区の一つであった油島には、国営木曾三川公園のシンボルとして木曾三川タワーが立っている（写真1）。そして道を隔てた南側には治水神社（写真2）と治水観音堂があり、堤防道路を南に下っていくと宝暦治水記念碑がある。油島は治水や利水の歴史と現状、河川環境、輪中村落の歴史などを教育する施設をもつ場であり、同時に宝暦治水工事で苦闘した「薩摩義士」を顕彰する「聖地」でもある。

「聖地」とはその場所が人々を引きつける磁力、あるいは人々に敬意を表させる権威をもっている場所である。この磁力ある場所、権威



写真1 木曾三川タワーから油島千本松を望む（左が木曾川、右は揖斐川）



写真2 治水神社

ある場所は同時に、タブーもそこには存在する。「聖地」油島はこうした性質を持つ場である。そしてこの「聖地」油島は、十九世紀末から二十世紀、およそ百年にわたって流域社会が創造してきた歴史空間である。この歴史空間では、祭礼や教育を通じてくり返し「薩摩藩士」たちの事績とその犠牲^{II}自刃が語られ、彼らは困難な工事に献身し、犠牲的な精神で流域社会を救済した功労者として表彰されてきたのである。

「薩摩義士」の事績に関係し、あるいは彼らを表彰するための史蹟・施設が、木曾三川流域に広域的に、さらには岐阜・三重両県を超えて存在している。そうした史蹟・施設は「聖地」油島を中心として創りあげられ、現存している。図1はそれを示したもののだが、記念碑・墓碑・治水遺蹟・位牌など、さまざまな物が「聖地」を取りまいて

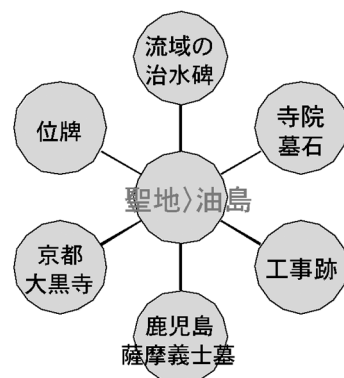


図1 「油島」を中心とする治水遺蹟

宝暦治水記念碑は、後述するように一九〇〇年に建立されている。治水神社の建立は一九三八年で、この二つの記念施設の建立を挿んで、多様な「薩摩義士」顕彰運動が組織され、〈聖地〉油島が創り上げられていった。その過程で、彼らの実績は流域社会のみならず京都や鹿児島においても回顧され、その功績が表彰されていった。

この歴史空間は、なにより多くの記念碑で成り立っている。表1は薩摩藩士関係の記念碑である。大樽川洗堰碑は油島とともに宝暦治水工事の難工事の場所であった大樽川の洗堰近くに建立されている（写真3）。この記念碑も宝暦治水碑と同じ一九〇〇年に建立されている。この記念碑については一八九八年夏頃から遺蹟周辺の人々が建碑を計画しており、宝暦治水碑の建立とは別な所でも顕彰運動が組織されていたことを示している（5）。

大正期になると、記念碑建立の動きは京都や鹿児島にも波及していった。治水工事が完了した直後に病死した平田鞠負の遺骸は、京都大黒寺に運ばれて埋葬された。ここには平



写真3 「薩摩洗堰跡」碑

〈表1〉宝暦治水関係記念碑（戦前に建立されたもの）

記念碑名	現所在地	建立(撰文)年月日	撰文者
宝暦治水碑	岐阜県海津郡海津町千本松	1900年4月	小牧昌業
大樽川洗堰碑	〃 安八郡輪之内町大藪	1900年12月	小崎利準
宝暦治水義士之碑	〃 羽島市江吉良	1902年晩秋	宮田慈僊
薩摩義士碑	京都市伏見区大黒寺	1919年11月25日	馬淵鋭太郎
三川分流碑	岐阜県海津郡海津町成戸	1923年3月	上田万平
宝暦治水薩摩義士之碑	愛知県犬山市	1924年3月29日	
平田鞠負終焉地記念碑	岐阜県養老郡養老町大巻	1928年5月	山田貞策
薩摩洗堰碑	〃 安八郡輪之内町大樽	1930年4月	島津忠重
追懷薩摩義士碑	〃 海津郡海津町油島	1935年10月	

田の墓碑（写真4）の他に「薩摩義士碑」が門前に立っている。この記念碑は府知事馬淵鋭太郎や京都府教育会などが尽力して建立されたのだが、その撰文には「鬼神をして壮烈に泣かしむる」薩摩藩士の事績を広く後世に伝えるための事業だと記していた（6）。

鹿児島市内の旧鶴丸城の東、城山の麓に「薩摩義士記念碑」は現存する（写真5）。少し坂道を上った所に位置する記念碑の場所から南には桜島が錦江湾を挟んで対面する。また市内平田町の平田公園には平田鞠負の銅像も建てられている。しかし一九二〇年十一月二十四日にこの記念碑が建立されるまでは、「薩摩義士」の事績はまったく鹿児島で知られていなかった（7）。しかし岐阜を中心とした顕彰運動において、彼らは赤穂義士以上の功労者だという評価が出てきたとき、「薩摩義士」の意味づけは誇張の度合いを高めていった。薩摩藩に「傲慢ナル意地悪ルキ幕府刻吏ノ頗使命令」があり、工事予算も二百万両に上り、「幕吏ノ検査峻刻」であったことが強調された。こうした幕府への敵意意識が郷土教育に利用されたのだった。

しかしこの歴史空間には薩摩藩士の死に関する記録史料は、過去帳などを除いてほとんど存在していない。治水工事については「蒼海記」、「宝暦治水御用状留」（「尾濃勢州川通御普請御用雑録」、「濃尾勢州川



写真4 京都伏見・大黒寺の平田鞠負墓碑



写真5 鹿児島の「宝暦薩摩義士記念碑」

通御手伝御普請御用中御状留」、

「両代官御連名之御状留」など

を含む『高木家文書』、各自治

体史に収録されている地方文書

などがある。だが『高木家文書』

には家臣であった内藤十右衛門

の自刃関係史料はあるが、薩摩

藩士の死去関連史料はない⁽⁸⁾。

薩摩藩士の墓石がある代表的寺

院である桑名の海蔵寺(写真6)

には、自刃を隠して埋葬を依頼

したと解釈されてきた永吉惣兵

衛の史料があるが、これも直接

的に自刃を証明するものではな

い。後述するように、宝暦治水碑の建立に奔走した桑名郡多度村の西

田喜兵衛は、建碑のために島津家や京都の大黒寺での調査を行っている

が、成果を得たわけではない。

この「聖地」油島を中心とした歴史空間は「口碑」で成り立っている。

そのことをもつともよく示すのは、宝暦治水碑建立後、西田が多

度村の磯貝勝に委嘱して行った西濃各地の遺蹟調査であった。磯貝は

一九〇七年二月二十三日から二十六日にかけて、海津郡太田村円成寺

や養老郡池辺村鬼頭家(平田の役館が置かれた家)、同村の天照寺、

安八郡檜俣新田村江翁寺、大藪村青木家・片野家、羽島郡石田村の後

藤家、大谷派別院、江吉良村清江寺などを巡回して、宝暦治水工事・

藩士の死に関する史料を搜索した⁽⁹⁾。天照寺が管理する共同墓地に

は薩摩藩士が埋葬されていたが、天照寺住職は過去帳以外に記録はな

く、「口碑二伝フル所ニヨレハ、当時赤痢病流行シ、遂ニ該病ニ罹リ

テ歿セシモノ、如ク」と、磯貝に答えている。また、檜俣新田の江翁

寺でも文書はなく、大樽川洗堰工事の困難さを伝える「口碑」を聞く

のみだった。



写真6 海蔵寺(桑名市)の「薩摩義士」墓碑
(中央が平田朝負の墓碑)

2 「聖地」の誕生

(1) 木曾三川分流工事

王政復古によって幕府が倒れたことによって、近世的治水体制は大きく変化することになり、水行奉行を務めた高木三家の役割も終わった。明治元年(一八六八)十一月笠松県権知事長谷部惣連は、「水利論」⁽¹⁰⁾を政府に提出したが、それが変化の始まりとなった。長谷部は木曾三川下流域での日常的な悪水滞留による水害と、洪水時の堤防決壊による水害に対して、旧来は対症療法的に堤防を修築することに止まり、多大な被害を出す水害を起きたときには「天災」で片づけ、十分な対策を尽くさなかったと、冒頭でこれまでの治水対策を批判した。そして三川の河口部の砂州における新田開発の停止⁽¹¹⁾と、佐屋川河道問題に言及している。

長谷部の三川の治水問題解決の要点は、土砂で埋まった佐屋川を再度疎鑿することにあった。木曾川の分流である佐屋川が土砂で埋まったことによって、木曾川の水勢が増し、木曾川と長良川の合流地点付近での堤防決壊が起き、また油島における揖斐川との合流地点でも木曾川の水が猛烈な勢いで揖斐川筋に流入し、揖斐川を逆流するという弊害を生じていると、流域の水流の問題を指摘した。宝暦以来の油島締切によっても事態は解決せず、平常ですら締め切り喰違口からの揖斐川へ流れ込む木曾川の水勢ははなはだしいと述べている。

新政府のもとで高木三家による河川管理の廃止、一八六〇年代から七〇年代にかけての連続的な水害⁽¹²⁾により、抜本的な治水対策の必要性は岐阜・愛知・三重の各県や民間で共通認識となりつつあった。「近來土砂堆積、水勢横行、動もすれば河身一定せず、為に堤防を破壊し、通船殆ど其便を失ふに至れり」⁽¹³⁾という現状を変えるために、一八七七年十一月愛知・三重両県は内務省に土木技師・内務省官員による調査を求め、オランダ人土木技師デ・レーケの木曾三川流域の調査が実施された。よく知られているように、デ・レーケは一八七八年四月「木曾川下流の概説書」を政府に提出し、河床の上昇を抑止するために土砂の流出を防止すること、木曾川と長良川との間に背割堤を設けて、両川を分流することを提案した⁽¹⁴⁾。他方、一八七九年十一

月、岐阜県西濃各郡の有力者は「美濃国水利改修懇請願書」を提出して、輪中集落の防水上の特性、江戸時代の治水体制と費用負担、洪水被害の状況などの歴史を振り返り、政府の負担による水利の改修を要求した⁽¹⁵⁾。

こうした調査や請願を背景に、一八八七年に予算を確定し、河川改修は国家事業、堤防の修築護岸工事は三重・愛知・岐阜の分担事業として、治水事業が実施されるに至った⁽¹⁶⁾。木曾三川治水工事の内容は、①背割り堤の築造による木曾川・長良川の分流、②三川の川幅の拡大、川筋の直線化、③大樽川の埋め立て、④佐屋川・筏川の埋め立て、⑤海口部の埋め立てであった。

一八九一年一月十九日、デ・レーケは元内務省土木局長の西村捨三に宛てた書簡⁽¹⁷⁾で、木曾三川下流域の改修事業は、「間断ナク隙ヲ窺フ所ノ強敵ニ向テ戦争ヲ開クノ端緒ニシテ、貴下及貴下ノ友人ノ企図スル所ハ、字義ノ真実ナル意味ニ於テ愛国ノ挙ト申ス可キ」と記して、工事の着手を讃え、担当者を激励した。そして分流工事の竣成は自然との「戦争」に勝利する一画期となった。

(2) 木曾三川分流工事の竣工式

一九〇〇年四月二十二日三川分流工事竣工式が、木曾川と長良川の合流点、両河川の流れを分流する背割り堤が南に向かつて延びている起点、海津郡成戸村で挙行された。この竣工式には山県有朋首相・松方正義蔵相以下、政府首脳が列席して盛大に行われた。山県は「吾邦治水改修ノ泰斗」とも評されていた。山県は内務大臣時代に治水政策を積極的に主導し、全国を六カ所の土木監督署に区分し、十三大川の改修工事に着手した⁽¹⁸⁾。山県が内務大臣に就任した一八八七年は、「治水上未曾有之真面目ヲ開キタル歳」であった⁽¹⁹⁾。山県など政府首脳をこの席に呼ぶことに尽力したのが、山県のもとで内務省土木局長を務めた西村捨三であった。後述するように、竣工式にあわせて招魂祭を実施することを計画したのも西村だった。

この竣工式典に続いて、油島千本松に建立された宝暦治水碑の前に、宝暦年度以降治水上ノ功績顕著ナル死歿者招魂祭⁽²⁰⁾が執行された。山県首相・松方蔵相・川村純義（島津忠重代理）の祝詞、木

曾川改修三川分流成工式事務委員長田中貴道の祭文に加えて、治水碑建立の最大の功労者である西田喜兵衛（後述）も祝詞を読んだ⁽²¹⁾。田中が読み上げた祭文は工事の犠牲となった薩摩藩士を「義没者」と呼び、初めて社会的な表彰を与えたのだった。

維レ明治三十三年四月二十二日、尾濃勢三州ノ国境油島ニ於テ、宝暦以降治水功労者ノ霊ヲ祭ル（中略）——三川の災害は連年続き、民命を奪い、良田を洗う。此ノ困厄ヲ救ハンカ為メ、経営慘澹一身ヲ以テ犠牲ニ供シ、治水事業ニ盡瘁セル者、宝暦以降薩摩義没者七十九士ヲ始メ、其数極メテ多シ、而シテ時ニ先後アリ、職ニ上下ノ差アリト雖モ、治水事業ニ熱誠ヲ注キ、国家ニ忠勤ヲ盡シタル功ニ於テハ、殆ト其ノ軌ヲ一ニス、嗚呼其功労ノ顕著ナルコト斯ノ如シ、豈敬重セサルヲ得ンヤ、今ヤ篤志者之ヲ始メニ唱ヘ、衆又能ク之ニ和シ、薩藩義没者ノ豊碑建チ、三川分流ノ成ルヲ機トシ、次テ朝野貴顕紳士ノ臨場ヲ辱クシ、茲ニ恭ク祭典ヲ行フモノハ、蓋幽光ヲ闡明シテ其ノ功労ヲ発揚シ、英霊ヲ泉下ニ慰スルカ為メナリ、加之三川分流既ニ成功シ、災害防止ノ施設モ亦完備シタルノ時、矧ヤ地ハ是レ古来心血ヲ集注セシ治水至難ノ遺跡タルニ於テヤ、嗚呼木曾ノ水ハ愈々清クシテ、其ノ功労ヲ湛ヘ、千株ノ松ハ彼ノ豊碑ト相待テ、長ヘニ其ノ徳ヲ頌セン、嗚呼英霊其ノ志望ノ漸ク達セシヲ嘉ミシ、尚クハ髣髴トシテ来リ享ケヨ

宝暦以降の治水工事の功労者が慰霊の対象であり、彼らは国家への忠誠を尽くした人々だった。彼らへの敬礼を表すための祭典は、あの世から死者の発する光（国家への忠誠者の功績が発する光）をこの世に明らかにし（功績を公表する）、それによって優れた霊魂（英霊）を慰撫することを目的としていた。つまり隠されていた功績を広く社会の表彰することが、犠牲者に報いることになると考えられた。記念碑はその表彰行為を永遠化する方法に他ならなかった。招魂とは功労者のあの世の霊を記念碑（＝霊の依代）に乗り移らせ、その徳＝功績を表彰することで、霊を慰撫させるという宗教観念に基づいた敬礼行

為である。この田中が読み上げた祭文は、日清戦争（一八九四～九五
年）の際に戦地や国内の死者追悼祭典で読み上げられた祭文と同一様
式（末尾が「尚クハ髣髴トシテ来リ享ケヨ」というフレーズで締めく
くられる様式）である（22）。薩摩藩士の顕彰運動は、十九世紀日本が
創り出した功労者招魂の宗教観念と形式のなかで行われていた。

島津忠重公爵の代理として祝辞を述べた伯爵川村純義も、三川分流
事業は薩摩工事に基礎があることを追懐し、死没した者の招魂祭を行
い、その事跡を表彰するために記念碑を建立する意義を述べ、これに
よって一地方の「口碑」にとどまっていた忠烈の事績が天下に表彰さ
れることに祝意を表した。

治水功労者の社会的表彰、招魂祭の執行の必要を全国に呼びかけて
来た団体が、治水協会（後述）であった。その機関雑誌の『治水雑誌』
第四号は大分県の広瀬・高森両用水の開鑿者で、明治になって猪苗代
疎水工事の指導者となった南一郎平の事績を紹介している（23）が、一
身を犠牲にし、家財を抛ってまで治水工事に専心した、南のような人
物の顕彰を呼びかけて、次のように述べる。

嗚呼聖世ノ余沢タル、南氏其人ノ如キ功成リ名遂ケ、身モ亦榮達
セラレシハ、今古ヲ通看シ感泣ニ堪エス、世上ノ志士仁人奮ツテ
邦家ノ長計タル治水事業ニ従事スヘシ、吾治水協会発起者ハ、古
来治水ノ為メ不幸ニ殞命セシ処ノ志士ヲ選拔シ、全国治水討死者
ノ招魂祭ヲ執行シ、祠宇ヲ建立シ、長ク其靈ヲ慰セントス、豈啻
炮烟彈雨ノ間ニ斃シモノノミ神ナランヤ、辛苦經營、俯仰天地ニ
愧ズ、万世ノ幸福タル国土保安ノ治水事業モ亦神トナルベシ、上
帝ノ照鑒果シテ如何

ここに「治水討死者」という戦死者を想起させる言葉が使われてい
ることは、たいへん刺激的であり、象徴的である。「治水討死者」の
神格化、彼らを祀る神社の創建、恒常的な招魂祭の執行が治水協会の
掲げた目標であり、こうした招魂のための施設を確立することで「志
士仁人」に治水事業への参加を呼びかけたのである。「治水討死者」
を祀る神社が戦死者のための靖国神社を想起させるものであったこと

は容易に推測される。そしてその
「治水討死者」のための神社とし
て治水神社が構想されていくこと
になった。

（3）宝暦治水碑の撰文

宝暦治水碑は油島から南に延び
る千本松原の堤防上、ちょうど松
並木が途切れる所に立っている。
写真7に見るように、治水碑の傍
ら（右手前）には一つの祠がある。
おそらくは水神の祠であろうが、
由来は明らかではない（24）。この
記念碑の後方には、治水碑建立に
寄附金（一円以上）を出した個人・団体の名を刻んだ「記念碑建設寄
附者賛成者姓名碑」が立っている。この記念碑の最後には、宝暦治水
建設有志総代願人として西田喜兵衛、特別賛助員として金森吉次郎
（大垣町）・峙本慈船（安龍院）・林竺仙（海蔵寺）・加藤心良（桑
名町）の名が見える。

宝暦治水碑は山県有朋首相の篆額、枢密院書記官長小牧昌業の撰文
になる（25）。治水碑に刻まれた撰文の内容は、（ア）木曾三川流域の輪
中地帯は長い間洪水の被害にあつてきたこと、（イ）宝暦年間に薩摩
藩が藩士六百人・三十万両を費やして治水工事を実施したこと、（ウ）
薩摩藩が油島・大樽川などの困難な工事を実施したこと、輪中地域
は洪水の被害を免れ、三川分流工事はこの薩摩藩の事績に起源をもつ
こと、（エ）工事終了後平田ほか数十人が自刃したこと、（オ）薩摩藩
士は身を捨てて公に殉じたもので、彼らの義烈は忘れられてはならな
いために建碑すること、の五点に要約できる。

なぜ建碑という事業が必要だったかを考えるうえで、薩摩藩士の事
績の評価にかかわる撰文の後半部分を引用してみよう（原漢文）。

思うに当時風淳樸として、人紀律を重んじ、気義を崇ぶ、諸子既



写真7 「宝暦治水碑」（右手前に水神祠が見える）

〈年表〉1900年代～1930年代の薩摩藩士顕彰運動の動向

1900 (明治33) 年	12月10日	「薩摩義士」追吊法会 (於桑名海蔵寺・主催金森吉次郎)
1902年		羽島市江吉良清江寺「宝曆治水義士之碑」
1903年	3 月	西田喜兵衛、京都伏見大黒寺にて平田の墓碑発見する
	8 月16日	海津郡今尾町頼了寺で薩摩義士百五十年忌追吊会が執行される
	9 月11日	海津郡高須町大谷派本願寺別院にて百五十年忌追吊会が執行される
1913年	11月23日	「薩摩義士義歿者墓碑」の建立 (養老郡池辺村大字根古地浄土三昧)
1913年		東京麻布学館長岩田徳義、薩摩義士顕彰会結成
1916 (大正5) 年	12月28日	平田靱負に従五位が追贈される
1919年	12月4 日	京都市伏見に「大黒寺薩摩義士碑」建立される
1919年	12月13日	桑名義士顕彰会結成
1920年	11月24日	「鹿児島薩摩義士記念碑」建立 (鹿児島市城山の麓)
1925年	10 月	海津郡内有志が治水神社建設委員会を結成
		内務省に神社創設許可を申請
	11月29日	薩摩義士顕彰会が組織される (養老郡池辺村・会長山田貞策)
	12月25日	大牧役館趾で神官僧侶を招き、追吊会・祭典を執行
		山田ら、海津郡今尾町常栄寺で義士 (黒田唯右衛門) の新墓を発見
1926年	3 月4 日	山田ら、国定教科書採録について請願書を衆議院議長に提出
	7 月	内務省、治水神社の祭神を平田一人とすることで創設を許可
1928 (昭和3) 年	5 月	治水神社起工式
	5 月6 日	「役館遺趾平田翁終焉地記念碑」除幕式 (祭主山田貞策)
	10月20日	桑名義士会の手で、海蔵寺に忠魂堂が建立
1930年	4 月27日	「薩摩堰遺趾之記念碑」の建立 (安八郡大藪村)
1935年	10 月	海津郡海津町油島に「追懷薩摩義士碑」建立
1931年	4 月3 日	海蔵寺忠魂堂に祀る85士の霊、鹿児島に到着
1932年	5 月25日	薩摩義士百八十年祭 (於海蔵寺忠魂堂)
1934年	3 月6 日	油島千本松原・大樽川洗堰河川敷、岐阜県指定史蹟となる
1938年	5 月24日	治水神社鎮座祭

に君命を奉じ、功程に就く、遂げざれば則ち已まず、苦心焦慮の余り、計已を得ず以てここに至る、土人伝うる所まさに謬らざるべきなり、然れば則ち是の役、事業の偉、且つ艱、以て想い見るべし、而して諸子の堅志撓まず、身を捨てて公に殉じ、竟に能く其の職守を全うして、以て沢を後世に貽す、則ち古の称する所の、

死を以て事に勤め功徳を民に加う者と謂うべし、豈に躋からずや、尔来百五十年、居民猶薩摩工事を頌して衰えず、言死者に及べば、則ち歎歎して涙下る者あり、皇治中興、百度維新、凡そ利を興し害を除く事、次第に修挙す、三川分流の策亦た果して施行され、成功將に近きに在り、茲の地の人士、既に聖世仁沢の洽きに感じ、因りて宝曆創始の功、又た命を致せし諸人の義烈を哀しみ、其の泯没して聞くことなからしむに忍びず、胥謀りて石を建て、其の功績を勒し、以て永遠に垂れしめんとして、来りて余に文を徴す

紀律化された人格者がどれほど困難な任務であれ、死を賭して成し遂げて民衆を救う(「死を以て事に勤め功徳を民に加う」)ことが評価されている。三川分流工事の竣工にあわせて、「義烈」者の追悼と功績とを永遠に石に刻んで残すという意図がここにあった。この撰文では平田以下の自刃の原因を「旧記に得て詳にするなし」と書く一方、予想外の経費増加の責任を取ったことにその理由を求めている。

(4) 〈治水の神〉となった平田靱負

この三川分流の竣工・記念碑建立をきっかけにして、木曾三川流域では様々な形での顕彰事業が続いていくことになった。しかも、それは京都や鹿児島へも波及したのである。一九〇〇年の三川分流工事竣工以降、一九三八年の治水神社創建までの顕彰運動を年表としてまとめた。

この年表から平田靱負個人の顕彰が中心的な課題であったことがわかる。一九一六年大正天皇の大礼を記念して、平田靱負へ従五位が追贈された⁽²⁶⁾。そして平田の遺蹟・墓碑が存在する桑名海蔵寺と養老郡池辺村が顕彰の中心地となった。両地では顕彰会の組織化がなされ、また海蔵寺では忠魂堂建立と百八十年祭があり、平田の役館のあった池辺村では追弔会や記念碑建立が行われた。

顕彰運動の広がりには京都や鹿児島だけではなく、東京における「薩摩義士」の教科書への掲載を求める運動へと展開していった。一九二六年三月四日、池辺村長山田貞策ら四十二名は、「薩摩義士」の事績

の国定教科書採録についての請願書を、第五十一回帝国議会の衆議院に提出した⁽²⁷⁾。この請願書の趣旨は、「多大の身命を犠牲」とした「薩摩義士」の偉績はようやく一九一六年の平田靱負に対する贈位によって世間に知られることになったが、全国民に周知させるために、「義士の真相を国定教科書に採録」し、「先人の遺徳を頌すると共に、第二の国民をして犠牲献身、忠勇義烈の念を涵養せしめ、以て萎微沈衰せむとする国民精神の作興に資せられたし」というものであった。

山田は一九二五年十一月二十九日薩摩義士顕彰会を組織していた。山田は「薩摩義士」の顕彰のために平田靱負の役館跡に記念碑を建立し、また養老公園に記念館を建て、他方国定教科書への採録を求めた請願運動を行うことを目的としていた。この顕彰会は総裁に島津忠承公爵を擁し、西田喜兵衛・金森吉次郎らを顧問に招いていた⁽²⁸⁾。山田らは講演会・演劇・啓蒙書出版などを通じて、岐阜県内外へ宣伝活動を積極的に展開した。この薩摩義士顕彰会の活動の特徴は、赤穂義士をしのぐ国家への献身者として「薩摩義士」を評価する点で、これまでの顕彰運動の論理と変わらなかったが、彼らの事績・自刃は幕府に憚って隠蔽されたのだと主張した点に新しさがあった。つまり、幕府と薩摩藩との対抗という文脈を強調したのである。一九二八年五月六日役館跡に平田終焉地記念碑が

建立された(写真8)。この除幕式で山田は、「幕府二憚ル所アリテ久シク秘密ニ付セラレ」てきたが、この事績が埋もれたままであることを憂慮して、この建碑を行ったのだと述べた⁽²⁹⁾。

山田ら池辺村関係者の顕彰運動でもう一つ注目されるのは、「薩摩義士」の墓の発見であった⁽³⁰⁾。村内の天照寺の火葬場・浄土三昧で、二十四名分の遺骨が確認された⁽³¹⁾。そして一九二三年十一月この地に「薩摩義士義歿者之墓」



写真8 平田終焉地記念碑

が建立された(写真9)。その後流域各所で墓地の改修が行われた。たとえばその一つとして海津郡石津村の円成寺がある。円成寺は十三名の薩摩藩士の墓石が存在していた。一九二五年十一月石津村

仏教会では、円成寺内の墓石周辺を整備して法要を営むための寄附を集めた。その趣意書によれば、当時すでに鹿児島から遺族をふくめ、学校の生徒児童や一般人などの参拝者が増えはじめており、そうした参拝者に配慮しようとしたのである⁽³²⁾。

しかし顕彰運動でもっとも注目されるのは、平田靱負を祭神として祀る治水神社の創建である。先に紹介した『治水雑誌』では、「治水討死者」のための神社の創建が構想されていた。また宝暦治水碑の建立を終えた後、それに尽力した西田喜兵衛は記念碑の近くに神社を創建して、薩摩藩士を「治水の祖神」とし、三川治水に貢献した官民の人士を合祀して、「永久治水守護ノ神社」とすることを構想していた⁽³³⁾。薩摩藩士が神として祀られたのは、どのような行為に対してであったのだろうか。「治水神社建設趣意書」には次のような文が見られる⁽³⁴⁾。

終日営々トシテ劳作ニ疲レ、疲労ト空腹ト二宿所ニ帰レバ、一汁一菜ノ粗食ニ甘ジ、納屋母屋ノ軒下ニ漸ク雨露ヲ凌ギ、雨ノ日風ノ日、日夜夜毎ニ繰返ス其苦痛モ、主家ノ浮沈ニ関スル重大事業トシテ、我慢ニ我慢ヲ重ネ、併モ成功ノ暁ニハ自決ヲ覚悟セル身ハ、日々見事ニ工事ノ出来上ルト共ニ、刻々死ノ域ニ近ヅクモノニシテ、所謂功成ツテ屍ヲ異境ノ空ニ埋ムルモノト謂フベシ

ここに示された人格は、自己の与えられた職務をいかなる困難な境遇においても果たし、主家の浮沈に関わるような事態が生ずれば、自



写真9 「薩摩義士義歿者之墓」

己の身を賭して責任を全うすることであり、全体性の実現に向けて自己の存在を抹消できる覚悟をもつことである。こうした人格をもつ存在として、平田は最初の構想からおよそ四十年を経て神格化され、治水神社に祀られることになった。

3 「薩摩義士」の発見

(1) 治水協会と『治水雑誌』

一八九〇年代前半、日本の治水事業の必要性を強く主張した全国的団体が治水協会だった。治水協会の設立の趣意は、「国土保全ノ基礎タル治水ヲ講究スルヲ以テ目的」として、「實際ノ事業ニ関係セサルモノトス」というものだった⁽³⁵⁾。

治水協会の発起人は元内務省土木局長であった西村捨三、治水共同社を結成し、木曾川下流改修工事に尽力した山田省三郎、静岡県天竜川の治水指導者だった金原明善の三人だった。彼らが発刊した『治水雑誌』は一八九〇年十二月に第一号が刊行され、一八九四年六月の第十二号で廃刊となった。最終号で西村捨三は「会員諸君に呈する書」を書き、治水協会の歴史を振り返り、おおよそ次のように述べている⁽³⁶⁾。

治水協会が設立され、この雑誌が発行されたのは、一八九〇年十一月の第一議会開設時であった。私は土木局に奉職しており、国土保全、治水の急務として、全国十三大川改修の端も開けた。そして金原明善・山田省三郎と謀り、本会の発起・本雑誌の発行をおこなった。山県首相以下会員数は千名に及んでいる。雑誌第一号は第一議会の両院議員に配布して、治水事業に賛同するように要請した。各大川治水継続工費は可決、以来治水問題はおおむね協賛を得てきた。第二号から第十一号まで発行してきたが、大阪府・農商務省の勤務の余暇に、編集作業は私が担当してきた。片手間の仕事になり、約束通りの発行ができなくなり、ちかく北海道に赴任するので、発行はいっそう困難な状況となった。治水事業は世人に是認され、治水期成会も成立したので、初志の半ばは

実現した。第十二号をもって、休刊する。

西村は明治政府の治水政策を主導する立場にあり、治水事業への協賛を得るために、帝国議会へ働きかけることが治水協会の設立の目的であった。初期議会が始まって、議会の治水への理解も深まり、新しく治水期成会も組織される一方、西村自身の北海道への赴任という事情もあって、廃刊に至ったのである。

西村・山田・金原はいずれも「治水熱心家」であった。しかも木曾三川や天竜川流域の名望家であった山田・金原は、家産の蕩尽をいとわず、山野を廻り、「国土保安ノ大業」、「公益」に尽力した。そして彼らは過去の「治水熱心家」たちを発掘し、その実績を積極的に『治水雑誌』で紹介した。日本の治水事業の歴史を探り、その功績を顕彰しつつ、現在の治水事業への理解を得ようとしたのである。おそらく彼らは歴史のなかの「治水熱心家」の姿と自らとを重ね合わせたのだろう。

西村が治水事業に熱意を示した理由は、『治水雑誌』に寄せた論説「治水ノ事ニ就テ」⁽³⁷⁾に明らかである。それは人民の生存のための稲作生産の増大を図るためには、水害の被害と治水工事費の支出を最小限に押さえることが必要だったからである。治水問題は「国土保全」という理念のもとに、直接的な河川改修の問題に止まることなく、社会の発展が河川に悪影響を及ぼすことをふまえて議論すべきだというのが、西村の意見であった。すなわち河川の水源の涵養や土砂の押し止という根本的な施策に着手するために、山林制度の弛廃、鉱山営業の隆盛、鉄道敷設の延長、道路改修の展開についての現状認識をふまえて総合的に政策が立案されるべきだと主張した。

他方、山田は「治水翁」とも、「治水狂」とも呼ばれた⁽³⁸⁾。山田については『治水雑誌』第十一号に「山田省三郎君小伝」⁽³⁹⁾が掲載されている。山田は天保十三年（一八四二）十二月五日、美濃国厚見郡佐波村の庄屋の家に生まれ、少年の頃の水害体験が治水に力を尽くすきっかけになったという。山田は一八七九（明治十二）年に、諸山の砂防・諸川の改修を政府に請願し、県下の水害を防止することを目的とした治水共同社を結成している⁽⁴⁰⁾。西村は山田について、「岐阜治

應相永元居士	同	九月廿日	吐田軍七	青兵微宿居士	同	十月廿四日	中問長 助
諱元清空居士	同		貴島助右衛門	大運玄道居士	同		
湛月淨空居士	同	八月廿二日	萩原勘助	悅岩孝折居士	同	十月廿一日	山村源左衛門
善好理元居士	同	九月廿三日	藤井彦八	端應之居士	同	十月廿八日	鬼塚喜兵衛
義寧宗卓居士	同	八月廿四日	石塚仁助	本室智空居士	同	十月十九日	川上島右衛門
自天養心居士	同	九月一日	紋島甚左衛門	實田法心居士	同	八月廿七日	濱島喜左衛門
雲津梁門居士	同	九月十日	橫山治右衛門	月庭總天居士	同	七月八日	藤田伊右衛門
觀元水喜居士	同	十月五日	(中問)八內	實妙直居士	同	九月九日	本田甚五兵衛
空山道鏡居士	同	五義經三月十三日	野村藤藏家來	荷月良同居士	同	五義年四月廿五日	普堅貞淵
實相本休僧士	同	同	永田佐右衛門家來	右伊勢國桑名郡輝寶洞宗海藏寺二埋罪ノ分			
自現覺了僧士	同	同	四院庚子六月廿六日	鎮定要關居士	同	寶曆四年七月廿六日	永田伴右衛門
元山道水信士	同	同	五義經四月廿六日	即知傳心僧士	同	六月十七日	中問茂木源助
右美濃國心右津郡太田村禪智宗圓成寺境內二埋罪ノ分		同	五義經四月廿六日	達翁宗本居士	同	八月五日	恒吉軍太郎
實傳要心居士	同	同	子九右衛門家來	秋林宗松居士	同	八月十九日	前田兵右衛門
功外宗助居士	同	同	嘉松親賢	提兵智宗居士	同	八月廿日	蘭田新兵衛
桂林智昌居士	同	六月五日	江永次左衛門	萩兵智空居士	同	八月廿三日	田名駒不爾
功長良節居士	同	七月十六日	崎元才右衛門	高雲寄堂居士	同	八月廿日	永山孫市
本窓要源居士	同	八月十四日	野村八郎右衛門	以心相傳居士	同	九月朔日	瀧間平八
	同	十月七日	四本平兵衛				

死没した薩摩藩士の姓名・法号・死亡年月日が記された『治水雑誌』第一号

堅心元凶居士	同	七月廿八日	非手ノ上渡右衛門
石同上左龍院ニ埋葬ノ分			
白峰義雲居士	寶曆四年癸卯九月三日	上村金左衛門	
碧天正雲居士	同	永山並右衛門	
秋萩凉心居士	同	八月二十日	徳田助右衛門
石同上麻薩寶賢長壽院ニ埋葬ノ分			
高雲丹月居士	寶曆四年癸卯八月三日	松崎仲右衛門	
本岳淨心信士	同	八月廿七日	渡邊良右衛門
得阿淨心信士	同	七月十二日	尾崎上兵衛門
淨阿宗清信士	同	十月十二日	丸田中兵衛
一阿圓心信士	同	十二月八日	右衛門 佐藤權四郎
石同郡香取村淨土宗常普寺ニ埋葬ノ分			
泰山道光信士	寶曆三年二月二日	和田善助	
石同郡坂手村福智宗長寺ニ埋葬ノ分			
又高木新兵衛家来内藤十左衛門ナル者一手ノ内中和			
泉新田普請所 塲所掛リナリシガ左ノ原因ニヨリ寶曆			
戌年四月二十二日御腹セリ			
聞 取 書			

私帳中と泉新田御普請所塲所掛相勘石村堤上置腹付之儀
土溝ノ塲所ハ石村庄屋興次兵衛へ吟味申付相直ニセ候得
共右興次兵衛儀横着者ニテ私指圖 儀何事モはきく
ノ埒明不申候ニ付青木次郎九郎様ニ御届可申上哉ト彼是
了簡仕候内最早御普請モ出来仕候哉右興次兵衛儀次郎九
郎様モ申上其分ニ仕候テ御徒目付衆被仰候者右土置
腹付土溝ノ相見へ候間入念候様ニ被仰候儀有之御尤ニ
奉存候右私手被不埒之儀ニ御徒目付衆ヨリ主人新兵衛
方ニ御沙汰モ可有之候哉左様ハ私儀難相立ト存切腹仕
了簡仕候以上

高木新兵衛家来

戊辰四月廿二日

内藤十左衛門

右ノ聞取書ハ總前青木次郎九郎御初メ諸役人出張尋問ノ
上之ヲ認ムタルモノナリ又死候改書書ニ左ノ如ク記載ア

ヤ

一 大腹横ニ切り切口八寸深四寸程ニ有之跡ニ相見ニ候切
口縫合符藥付有之候外ニ純無之候

一 喉右ノ方ヘヨリ疵二箇所ニ少々ノ疵ニ御腹候石ノ通

（２）治水功労者の発掘

水共同社員ニシテ岐蘇川改修ヲ非常ニ熱望シ、事ニ当テハ田園ヲ沽却シ、私費奔走スル如キ希有ノ篤志家ナリ、因云、天竜川改修ノ端緒ヲ開カンカ爲メ、一家ノ資財數万円ヲ抛チ、治水ニ従事シタル金原明善ノ如キハ、寔ニ希世有爲ノ士ト云フヘシ、筑後川改修熱心家ニ田中正義ナル老人アリ、身命ヲ忘テ改修是レ期セリ、千載一遇ノ工事ニハ必ス希世ノ志士相伴フハ、亦天意ノ然ラシムルトコロ歟」と、天竜川ノ金原明善、筑後川ノ田中正義とならぶ「熱心家」として評価した（4）。

山田は「身ヲ忘レ、家ヲ遺シ、田園ヲ沽却シ、家産ヲ蕩尽シテ省ミズ」治水事業に尽力し、「殆ド狂スルガ如ク、公義ノタメニ私利ヲ抛ツ」人物だと評された（42）。

「治水熱心家ヲ鼓舞作興スル」ために、『治水雜誌』はさまざまな記事を載せた。内外の土木技師や治水経験家の論説、治水の沿革や工事の得失、日本の過去の著名な治水事業（河村瑞軒の安治川開鑿、角倉了意の高瀬川運河・保津川開通、熊沢蕃山の備前の水利、武田信玄の龍王堤、加藤清正の緑川堤、木曾川の御囲堤、油島の締切り、筑後の千里久堤、武蔵の見沼用水など）の検証に加えて、「内外既成工事ニ係ル熱心家・發起人若クハ担当者・技術師ノ経歴始末」という、過去の治水事業に功勞のあつた人々の事績を顕彰することをめざした。

内外各熱心家・発起家・担当者・技術者等カ、千辛万苦瀕死ノ事業能ク其功ヲ奏シテ、身モ亦榮達スルアリ、半途ニシテ楊機ニ触ル、アリ、成功スルモ讒誣ノ斃ル、アリ、内外其人幾百人アルヘシ、後年其慶ニ頼ルヲ得ルモ、孤魂無依、一片ノ残碣、一場ノ口碑ニ止マルモノ尠ナカラズ、邦家ノ為メ彈丸矢石ニ斃ル、モ、治水興益ノ為メ非業ノ死ニ陥ルモ、其報國ノ精神ニハ更ニ軒輊無シ、故ニ如斯人士ノ経歴小伝ヲ掲載シテ、其成否得失ヲ評論シ、大ニ後人ノ發奮ト警戒トヲ促サントス (43)

顧みられることがないまま忘れられた治水事業家たちの業績の発掘が『治水雑誌』の発刊の目的の一つだった。治水工事で「非業ノ死」

〈表2〉『治水雑誌』に紹介された治水功労者一覧

人 名	出身	事 績	掲 載	発行年月日
薩摩藩士	薩摩	宝暦4、5年の木曾三川下流域での治水工事	1号	1890年12月
馬場伊左衛門	岐阜	明治期の木曾川改修工事、1890年「遺功碑」建立	1	〃
伊藤伝右衛門	美濃	大垣藩士、安八郡各村の悪水流通工事、天明5年工事の過失の責任を取り自刃、治水紀功碑の計画あり	2	1891年1月
ヨハネス・デ・レーケ	蘭国	淀川・木曾川の河川改修、大阪など諸港の築港	2	〃
古河善兵衛	岩代	慶長年間の奥州伊達信夫地方の築堤工事	3	1891年2月
広瀬誠一郎	茨城	1888年起工の利根川運河の開鑿工事	3	〃
沢村勝為	陸奥	磐城郡の小川掘り割り工事、工事終了後讒言を受け自刃、安政2年「小川渠碑」建立	4	1891年4月
南一郎平	大分	広瀬・高森両水路の開鑿工事	4	〃
野中兼山	土佐	土佐藩家老、室津港築港	5、6	1891年6、8月
田中政義	筑後	筑後川改修工事、「筑後ノ治水狂」	5	1891年6月
鷲尾正直・岡田龍松	新潟	信濃川改修工事	6	1891年8月
湯本義憲	埼玉	衆議院議員、「治水専修家」、全国治水事業の建議	8	1891年11月
石黒五十二	一	筑後川大改修の担当技師、安積疎水改築担当技師	8、10	1891年11月、1892年4月
松井五郎兵衛	日向	飢肥藩士、寛永年間の新井手用水の開鑿工事、寛延元年(1748)建碑、1891年「松井翁疎水碑」建立		
田代重栄・同重仍	筑後	寛文年間の筑後川から引水する灌漑用水工事	9	1892年2月
山口素堂	甲斐	元禄年間笛吹川改修工事	10	1892年4月
金森吉次郎	岐阜	長良川・揖斐川改修工事	10	〃
山田省三郎	岐阜	木曾川改修工事	11	1892年5月
井上亀太郎ほか7名	大分	東諸県郡本庄川沿岸水路の開鑿工事	12	1892年6月
渡辺庄右衛門	下総	天保年間の葛飾郡阪川用水の開鑿工事	12	〃

を遂げた人々は戦死者に匹敵する功労者だった。

『治水雑誌』が紹介した治水功労者を表2に掲げた。十七世紀以降治水に功績を挙げた「熱心家」が全国から拾い上げられていた。『治水雑誌』第五号はとくに、天竜川の新原明善（『治水雑誌』の発行人であるためか「経歴始末」には載っていない）、木曾川の山田省三郎、筑後川の田中政義の三人を特筆し、「古来治水上身ヲ犠牲ニ供シ、一死ヲ以テ百難ヲ排シ、能ク其功ヲ奏スル」事績を評価した⁽⁴⁴⁾。

(3)「油島メ切工事」関スル経歴始末

宝暦治水工事に動員された薩摩藩士たちは『治水雑誌』第一号で、「油島メ切工事」関スル経歴始末⁽⁴⁵⁾と題して紹介された。これによつてはじめて薩摩藩士の事績が全国的に明らかになった。すこし詳しくその内容を見てみよう。

油島メ切工事ノ極メテ困難ニシテ、経費不貲予算頗ル増高シ、竣成ノ期モ亦遷延セシヲ以テ、当時手伝ヒノ本部タル島津家ノ工事係リノ内四十五六名、申訳ケノ為メ屠腹自盡ノ事ハ、左ニ始末ヲ掲クル如ク、現ニ各地ニ墳墓アリ、油島ニモ小祠ヲ建立セリ、事実疑ヒナキコト、思ワレタレド、当時ノ世態病死ニ托シテ隠蔽セシモノト見ユ、殊ニ彼美濃国住人寄合旗⁽⁴⁶⁾下ニテ、尾濃勢三州ノ水行奉行高木新兵衛ノ家来、内藤十左衛門カ屠腹セシコトナドヲ以テ視レハ、置嵩腹付カ目論見通りナラストテ、自盡セシホドノ世ノ中ユヘ、薩摩ノ果ヨリ不案内ノ美濃地ニ来リ、無比ノ難工事ニ従事シ、自分量手加減的ノ工法ヲ以テ運動シタルコトナレハ、賽ノ河原ノ石積同様兇戯ニ類セシ工事多ク、為メニ費用ト歳月トハ予期予算ト伴ハス（云々）

このように油島締切工事が難工事であり、経費も増加し、また竣工も遅れたことに基因して、薩摩藩に多くの自刃者を出したことを残念だと述べていた。そしてこれに続いて、

何ニセヨ五十名近キ人々カ申訳ケノ為メ屠腹シテ、冤魂今ニ瞑セ

サルハ、俯仰涙ノ下ルヲ覚エス、今ヤ木曾川工事ニ於ケル泰西工法沈床工事等ヲ以テ、桑名土木監督署ノ手ニテ、同川下流ノ各派川、鰻江・青鷺・白鷺・筏川等ノ数派川ヲ何ノ苦モナク、予期予算ノ通りメ切ヲ成就セリ、彼油島ノ幽霊モ寔ニ後ニ瞳若トシテ成仏スヘシ、他年改修総テ奏功セハ、此事ニ係ル古今志士ノ為メ一大記念物ヲ建設シ、宝暦年来ノ一大団円ヲ謀ランヲ希図ノ至リニ堪ヘス

と、現在の三川分流工事が竣工した際には薩摩藩士の「冤魂」を慰撫するため、また治水工事の貢献のあった「志士」のために記念碑を建立することを提案したのである。しかしこの記事が薩摩藩士の自刃の根拠としたのは「口碑」であった（「口碑」に依レハ、右大修理ノ節薩摩守家来ニテ現場へ出張セシモノ、内、左ノ四十五名ハ該工事ノ極メ

＜表3＞『治水雑誌』掲載の自刃者の姓名・法名・死亡年月日

姓 名	法 名	死亡年月日	埋 葬 寺 院	『先人たちの鎮魂碑』
稲富市兵衛	枯岩意休居士	4年9月19日	美濃国下石津郡太田村円成寺(曹洞宗)	
吐田軍七	応相永元居士	9月20日	〃	
貴島助右衛門	諦元清空居士	〃	〃	
萩原勘助	湛月淨円居士	8月22日	〃	萩原勘助「湛月淨円居士」
藤井彦八	善好理元居士	9月23日	〃	
石塚仁助	義峯宗卓居士	8月24日	〃	
鯨島甚五左衛門	自天養心居士	9月1日	〃	
横山治左衛門	雲津梁門居士	9月11日	〃	
八内(中間)	観元永喜信士	10月5日	〃	「観元永喜信士」、自刃日は10月10日
野村藤蔵家来	空山道鉄居士	5年3月13日	〃	「空山道鉄信士」、「俗称不詳」とある
関右衛門(永田佐右衛門家来)	実相本休居士	4年6月26日	〃	「実相本休信士」
角助(弟子丸小右衛門家来)	自現覚了居士	7月27日	〃	「自現覚了信士」
八郎兵衛(若松円積下人)	元山道永居士	5年4月28日	〃	「元山道永信士」
永吉惣兵衛	実伝要心居士	4年4月16日	伊勢国桑名郡海蔵寺(曹洞宗)	「実伝要真居士」、自刃日は4月14日
江夏次左衛門	功外宗勲居士	6月5日	〃	
崎元才右衛門	桂林智昌居士	7月16日	〃	自刃日は9月16日
野村八郎右衛門	功岩良節居士	8月14日	〃	
四本平兵衛	本窓要源居士	10月7日	〃	
長助(中間)	青兵徹霜居士	10月24日	〃	「青兵徹霜信士」
家村源左衛門	大運玄道居士	〃	〃	
山本八兵衛	悦岩共祈居士	11月21日	〃	
鬼塚喜兵衛	端応玄の居士	12月28日	〃	「瑞応玄の居士」
川上島右衛門	本室智空居士	10月19日	〃	
浜島喜左衛門	実田法心居士	8月27日	〃	浜島喜右衛門
藤田伊右衛門	月庭楚天居士	7月8日	〃	藤崎伊右衛門
本田甚五兵衛	実宗妙直居士	9月9日	〃	本田甚兵衛、「実宗明真居士」
音堅貞淵	荷月良同居士	5年4月25日	〃	音方貞淵、「荷月良円居士」、自刃日は宝暦4年4月14日
永田伴右衛門	鎮定要関居士	4年7月26日	〃 安龍院	
茂木源助(中間)	即妙伝心居士	6月17日	〃	墓碑が現存しない者
恒吉軍太郎	達翁宗本居士	8月5日	〃	
前田兵右衛門	青林宗松居士	8月19日	〃	
蘭田新兵衛	秋林宗中居士	8月22日	〃	「秋林宗仲居士」
平田(名前不明)	堤岩智全居士	8月23日	〃	「俗名不詳」とされる
永山孫市	高雲青峯居士	8月29日	〃	墓碑が存在しない者
瀧間平八	以心相伝居士	9月1日	〃	瀧間平八、自刃日は8月29日
井手上渡右衛門	堅心元固居士	7月28日	〃	井出上渡右衛門
上村金左衛門	白峰義雲居士	9月3日	長寿院(臨済宗)	上田金左衛門
永山嘉右衛門	碧天正雲居士	〃	〃	
徳田助右衛門	秋嶽涼心居士	8月20日	〃	
松崎仲右衛門	高雲丹月居士	8月3日	常音寺(浄土宗)	
六右衛門(淵辺良右衛門家来)	本岳浄心居士	8月28日	〃	●六左衛門、「本岳浄心信士」、自刃日は8月8日
尾上與兵衛(有馬勘左衛門家来)	称阿浄心居士	7月12日	〃	●尾上半兵衛、「称阿浄円信士」
田中善兵衛(丸田金左衛門家来)	浄阿宗清居士	10月15日	〃	●「浄阿宗清信士」
森権四郎(有間左衛門家来)	一阿円心居士	12月8日	〃	●「一阿円心信士」
和田善助	春山道光居士	5年2月2日	長禅寺(曹洞宗)	●「春山道光信士」

(注)『治水雑誌』記載の死没した薩摩藩士の姓名・法号・死亡年月日・埋葬寺院を現在確認されているそれらと比較したものである。(『先人たちの鎮魂碑』社団法人中部建設協会桑名支所、1998年)。 ●印は病死者とされている者をさす。

テ困難ニシテ、許多ノ藩費ヲ失フモ容易ニ竣工ヲ奏セサルヨリ、遂ニ割腹死ヲ以テ其罪ヲ償フニ及ヒシナリト」。

表3はこの記事で紹介された自刃者のリストである。全部で四十五名の姓名・法名・死亡年月日が記載された。それらは桑名の海蔵寺・安龍院・長禪寺、桑名郡香取村の常音寺、下石津郡大田村の円成寺の五寺院で確認されたものである。しかしながらこのリストには安龍院埋葬者として「平田 名前不明」とあるのみで、平田靱負の名はない。「平田」という人物もその戒名は「提岩智全居士」で、平田靱負の戒名とは違っている。つまり一八九〇年の段階の調査では、平田靱負の墓碑はこの流域では発見されず、彼は自刃者として紹介されていなかったのである（現在海蔵寺には平田靱負のたいへん立派な墓碑がある。写真6）。

薩摩藩士の自刃者の紹介に続いて、水行奉行高木新兵衛の coming、内藤十左衛門の自刃が紹介され、自刃の事実を示す「聞取書」と「死骸改書」が引用された。そして最後に内藤の他にも、幕府小人目付竹中伝六の自刃にもふれた。しかし問題は「口碑」を根拠とした自刃説の主張である。『治水雑誌』は自刃説を補強するために、海蔵寺所蔵の寺証文（宝暦四年六月七日）を取り上げている。それは病死した江夏次左衛門の埋葬を依頼したもので、海蔵寺に埋葬された薩摩藩士十四名には、こうした寺証文が存在するかのよう書き方を『治水雑誌』はしている。そして結論として、「僅々二箇年ニシテ斯ク多人数ノ病死スル筈万々之レナカルベシ、然ラハ則チ割腹ノ説反テ信ナラン」と述べている。宝暦四年四月から五年四月までの一年間（『治水雑誌』は二カ年間で誇張して書いている）に、このような多数の病死者の出現はあり得ないので、自刃説の方が確かだろうと推測したのである。

4 西田喜兵衛と薩摩藩士顕彰運動

（1）運動の始まり

これまで述べてきた治水協会の動きとは別の所で、薩摩藩士の事績発掘の動きが見られた。〈聖地〉油島から揖斐川を挟んで西に位置する桑名郡多度村の西田喜兵衛の顕彰運動である。西田の顕彰運動、と

くに宝暦治水碑の建立への取り組みについては、西田嘉兵衛『濃尾勢三大川宝暦治水誌』（二九〇七年刊、上下二冊）にくわしく書かれている⁽⁴⁶⁾。

西田は弘化二年（一八四五）六月一日桑名郡戸津村に生まれ、一八七四（明治七）年八月第三大区四小区副戸長をかわきりに、一八八九年一月桑名郡戸津村ほか五カ村の連合戸長を辞めるまで、戸長・学務委員を連続して勤めていた。西田が薩摩藩士の顕彰運動を始めたのは一八八二年のことだという⁽⁴⁷⁾。一八八九年に連合戸長を辞めたとき、家族を前にして年来の志願であった県社多度神社の国幣大社への昇格と、薩摩藩士の事績顕彰の二大事業に専心する決意を述べたという⁽⁴⁸⁾。西田家には薩摩藩士の治水工事の恩恵を忘れてはならないという家訓があったといい、それを記した文書は一八七六年の伊勢暴動の焼き討ちで焼失したという⁽⁴⁹⁾。これが事実かどうかについての確認はできない。しかし、西田の祖父金太夫（芝勝）は戸津村の田地改良（低湿地に土砂をいれて三十町歩余の良田とする）に尽力し、一八八五年十二月にその功績を称えた「重脩田地記念碑」が建立されており、このことが何らかの影響を与えたのかもしれない⁽⁵⁰⁾。

西田の動きをもっともよく示すのは、一八九九年九月二日西田が岐阜県知事野村政明に対して行った薩摩義士記念碑建立に関する経過説明である⁽⁵¹⁾。西田が鹿児島出身の野村に面会して、「忠魂義烈者の英霊」を慰めるために記念碑を建てることに賛成を求めた時の記録である。以下その動向の概略を示そう。

西田が顕彰運動を始めた理由は、祖先以来宝暦治水工事の恩恵を受けてきたことにあった。そして一八八四年七郷輪中の戸長宮崎以徳と相談して、「義歿セシ高士」の記念碑を建立することを決定し、あらかじめ薩摩藩士の霊魂を慰めるために、真宗大谷派の法主を招いての吊祭を計画したが、これは実現するに到らなかった。一八九三年になり、「義歿者」埋葬寺院であった桑名町海蔵寺住職時本慈船らが、記念碑（「メ切千本松記念碑」）建設のための賛同を西田に求めた。この後西田と時本らは協力して記念碑建立運動に奔走することになり、東京で島津公爵家・松方正義・西郷従道など旧薩摩藩関係者や在京三重県出身者などに趣旨を説き、賛同を求めるための活動を行った。そ

の後、岐阜・愛知・三重各県内の有力者の勧誘を行い、千人を超える賛同者を得たが、峠本らは寄附金募集・建碑という今後の事業すべてを西田が担当するように懇願した。峠本らは本格的な事業開始を前に、その困難さを自覚して、一八九四年十一月すべてを西田に委任した⁽⁵²⁾。

西田は第四区土木監督署長佐伯敦崇を「木曾川改修工事二付テハ監督署長タル貴官ハ則チ平田勲貞氏ノ位置ナリ」と説得して、その全面協力を得て、寄附金募集活動を開始した。寄附金募集は名古屋地方を佐伯が、岐阜・三重両県を西田が担当することになった。西田は建碑趣意書・寄附金募集帳を岐阜県海津・安八・養老・不破・厚見・羽島各郡、三重県桑名郡の郡役所を通じて各町村の大字単位に配布し、また郡町村長・区長に面会して直接協力を求めた。一八九五年から九六年にかけて本格的な活動を行い、一八九六年九月の大水害で中断を余儀なくされたものの、一八九七年に再開した。西田は野村岐阜県知事を前にして一八九三年五月以来の運動について、「家業ハ全然放任ノ姿ニテ奔走苦心スルモ、何ノ見ルヘキ点ナク、唯々雑費ノ相嵩ムノミニシテ（中略）従来ハ勞シテ功ナク実ニ遺憾」だとして、野村の協力を求めた。

(2) 西村捨三の協力

西田は野村政明岐阜県知事に対して、建立費二千六百円の内千五百円を岐阜県が支出するように要望した⁽⁵³⁾。この野村との面会までに三重県桑名郡で集めることができたのは、わずかに百四十七円に過ぎなかった。油島を抱え宝暦治水と深い関わりのある桑名郡ですら、この程度の寄附金しか集まらない状況だった。しかも西田によれば、建碑事業は私利を営む行為だと西田を非難する声もあったという。こうした西田の苦境の真情の吐露を受けて、野村は治水工事のため藩が困窮したことを故老から聞いてきたと述べ、薩摩藩士の顕彰に奔走する西田に深く感謝する意を表した。そして土木課長田沢実入を呼び、西田に協力するように指示を与えた。

こうした苦境に転機をもたらしたのが、上述した治水協会の発起人で、「治水熱心家」の顕彰に積極的に取り組んできた、元内務省土木局長西村捨三（当時は大阪築港事務所長）との接触であった。一八九

九年十月二日田沢から、西村が来春の三川分流工事竣工式にあわせて、これまでの工事で死亡した者の祭典を執行する準備のために、岐阜を訪問、岐阜の関係者も参会する旨の報がもたらされた⁽⁵⁴⁾。十月四日西田は西村と面会し、これまでの記念碑建立運動を始めるきっかけとその後の経過を述べ、協力を求めた。西村は関係者の支持が必要だと、そこで建碑の趣旨を話すように西田に指示した。その後西田は岐阜県参事会員山田省三郎に会い、山田の紹介で出席者と面会することができた。山田に加えて、大垣の金森吉次郎との接触が岐阜県側に協力者を広げていくことになった⁽⁵⁵⁾。

西田はこの会合の席上で、建碑の趣旨を詳しく演説し、出席者の賛同を得ると同時に、分流工事竣工式と宝暦治水碑建設を同時に実施することが決定された。西村は上京後、内相西郷従道・元首相松方正義・文部大臣樺山資紀（元内相）に記念碑の撰文などについて相談することなどを、西田に告げた。

西田は西村と面談した後、作成日時は不明だが、「治水致命記念碑建設要旨」を作成した⁽⁵⁶⁾。西田は油島締切と大樽川洗堰の二つの難工事を失敗をくり返しながら成功に導き、流域民を救った薩摩藩士たちの苦闘を述べ、現在の肥沃な田地を作り上げた彼らの「忠魂義胆」を永遠に伝えることの意義を説いた。こうして木曾三川分流工事と宝暦治水事業とはリンクし、西村を通じて薩摩閥の有力な政治家の協力を得る見通しができたのである。そして翌年二月六日西田は上京して、川村純義・黒田清隆・高崎正風、尾張徳川家などから寄附金を集めることができた。

こうして西村の協力・指示で建碑運動は促進されていったが、一つの問題が両者の間にあった。それは薩摩藩士の事績と死因に関する証拠書類の存否問題であった。すでに十月四日の最初の面会の席上、西村はその証拠書類の提示を要求していた。十月十一日西田に宛てた西村書簡では、「島津家ニテ取調ラレ候工事由来書ニハ死亡人ノ事明記無之、屠服セシヤ病死セシカ不相分候間、其辺ノ伝来詳敷御調へ、某寺誰々埋葬ト申事、郡村寺号姓名等過去帳ニ付委細ニ取調へ、御差越相成度、島津家ノ調ハ表向丈ノ調ニテ、屠服者ノ事一切不相分、右二

テハ記念碑建立ノ精神無之、此取調必要ニ有之候、後日間違無之様御注意有之度」と述べて、調査の結果を報告するように依頼していた⁽⁵⁷⁾。西村は記念碑に正確な自刃者の姓名を刻む必要があり、彼らの慰霊祭典が記念碑建立の目的だと理解していた。

これを受けて西田は各寺院に死者の姓名などの取調を依頼し、十月十九日の西村宛書簡では各寺を巡回して調査を行っていることを報じると共に、各寺からの取調書七通を送付した⁽⁵⁸⁾。竣工式直前の三月下旬には、竹中伝六・内藤十左衛門の自刃者としての確認があり、四月初めには廃寺同様であった羽島郡江吉良村清江寺で、瀬戸岩助・平山牧右衛門・大山市右衛門の三基の墓石を発見があり、記念碑に追加彫刻される⁽⁵⁹⁾など、最後まであわただしい状況のなかで建碑式が準備されたのだった。

記念碑建立後、西田は西村の助力の内容を整理しているが、それによれば、① 碑石の選定と購入、文字彫刻者の選定、② 碑文の選者及び筆者の推薦、③ 台石の産地の選定、④ 建碑場所への三度の出張、⑤ 建碑式への山県首相・西郷内相など政府関係者、各県知事出席の幹旋、⑥ 碑文拓本の天皇への献上幹旋、⑦ 永吉惣兵衛切腹証文（後述）印刷手配などであった⁽⁶⁰⁾。西村の存在と一九〇〇年の分流工事竣工式の予定がなければ、これほど急速に建碑の成功にこぎ着けることはできなかっただろう。

5 自刃か、病死か——薩摩藩士たちの死因——

(1) 自刃説とその定着

すでに紹介したように、『治水雑誌』第一号は薩摩義士の事績を紹介し、「口碑ニ依レハ（中略）遂ニ割腹死ヲ以テ其罪ヲ償フニ及ヒシナリト」と述べた。そして西田嘉兵衛も島津家や地元寺院を調査しながら、自刃した藩士の姓名を確定していった。自刃説が広く社会で認められていく上で、一九〇〇年の宝暦治水記念碑の建立、その後の積極的な「薩摩義士」顕彰運動があったが、決定的な意味をもったのは、宝暦治水工事を種々の史料によって詳細に研究した『岐阜県治水史』の出版であった。

ちょうど治水神社が創建された一九三八（昭和十三）年、岐阜県会で治水史の編纂の要望があり、翌十四年八月岐阜県は郷土史家の伊藤信・森義一・大野勇の三名に編さん委員の委嘱をおこなった。伊藤らは岐阜県所蔵の笠松郡代・飛騨郡代の文書、東西両高木家の文書を中心に、その他県内外の調査の結果得た諸文書を活用して、編さんにあたった。執筆分担は、古代から宝暦治水工事までは伊藤、それ以降幕末までと徳川時代の治水制度については森、明治以降は大野であった。そして二年半後の一九四二年三月に脱稿し、治水史編さん事務室は閉鎖された。しかし戦争のため原稿の印刷に至らず、ようやくサンフランシスコ平和条約の発効を記念し、岐阜県の文化事業として、一九五三年に出版されるに至った⁽⁶¹⁾。

『岐阜県治水史』の宝暦治水工事の叙述を全体として貫くトーンは、幕府と薩摩藩との対抗、とりわけ幕府の薩摩藩へのきびしい姿勢を強調したことであった。幕府が薩摩藩に手伝い普請を命じたのは宝暦三年十二月二十五日のことだったが、この急報が鹿兒島に届いたときの様子について、「迎春屠蘇なお眉宇の間に漂う折柄、突然斯様な奉書に接した藩主重年並重臣等の驚愕は如何ばかりであつたろう。必ずや幕府の暴圧手段に、痛憤の血涙が隻眼に迸つたことであろう」と記述している⁽⁶²⁾。戦前の薩摩義士顕彰本に見られるような、小説的な表現であり、工事中手前から両者の敵対性が「暴圧」という強い言葉を使って語られていた。

そして、藩財政はきわめて深刻な状態にあり、財政担当の家老として平田靱負は、この手伝い普請でさらに財政が悪化することを憂慮しつつも、治水工事による木曾三川流域の住民の生産の安定ということを考え、「薩藩は民力疲弊し、財政上の憂苦に当面して、左支右吾の策に窮すること万々なりとはいへ、事茲に至つては、苟くも遅疑逡巡すべきでない」として、「幕命を甘受する」ことになったと、文章は続いている。

『岐阜県治水史』は宝暦四年二月から始まった定式普請（毎年春に地元で実施した堤防などの修繕工事）、急破普請（前年八月の洪水で被害を受けた堤防の復旧工事）で最初に出た薩摩藩士の犠牲者に言及する一節を設けている⁽⁶³⁾。そして、最初の犠牲者として、四月十四

日に自刃した永吉惣兵衛と音方貞淵の二人をあげている。自刃しなければならなかった理由は、幕府普請役人と薩摩藩士との衝突があつて、それに対する「薩摩隼人」の「憤慨」だとしている。薩摩藩士たちは「太刀執る身を以て土工を監督し、朝に星を戴いて出て、夕に月を踏んで宿に帰るも、疲労を慰める設備も整わず、一日一汁の粗食に漸く飢渴を凌ぎ、千辛万苦を嘗めつゝ、工事に従事した」にもかかわらず、工事のやり直しを命じられることもしばしばあつた。それ故「御手伝方に間違や失敗があれば、指揮者の普請役は容赦無くこれに剣突を喰わせたものであらう。偶には腸を抉られるが如き皮肉や、嫌味をいわれた事もある。殊に指揮者は幕府の威を仮る旗本で、御手伝方は陪臣である。物一つ言われても、角立つて聞えるのは、強ち工事に不馴な御手伝方のひがみのみではあるまい」と、記述は続いている。

こうした幕府役人による薩摩藩士への態度の記述の根拠となつている事実は、福束輪中の海松新田の蛇籠の設置につき、高木新兵衛の実地見分の結果、そのやり直しが高木から村に命じられたことである（宝暦四年三月二十八日高木家臣原田嘉左衛門宛幕府普請役青山喜平次書簡）。しかしこの事実にとどの程度薩摩藩が絡んでいるのか不明である。薩摩藩の工事監督に不十分なものがあつたことが、工事の不備の原因なのかどうかはわからない。しかも、自刃したとされる永吉と音方は四の手（伊勢金廻輪中から伊勢海落口までが工事区間）担当であり、福束輪中は三の手（美濃墨俣輪中から本阿弥輪中までが工事区間）に属している。だとすれば、両人の自刃の理由としては福束輪中の工事不備以外の、幕府役人が威を張って容赦なく薩摩藩士を取り扱ったことを推測させるような、何らかの根拠が示されなくてはならない。

また両人の自刃日が四月十四日であるという根拠もまったく示されていない。『治水雜誌』が載せた犠牲となつた薩摩藩士の一覧表では、永吉は宝暦四年四月十六日、音方（『治水雜誌』では「音堅」）は宝暦五年四月二十五日である。

さらに第一次工事期間中の七月には藩主重年が江戸参勤の途次、普請場を視察し、重年は平田から工事の説明を聞いた。この時の様子を『岐阜県治水史』は次のように書いている⁽⁶⁴⁾。

薩摩守は平田総奉行より此までの工事についての詳細な説明を聴取し、少からず吃驚した。殊に永吉惣兵衛・音方貞淵を初め、六月に入つて、江夏次左衛門・茂木源助・長田佐左衛門家来関右衛門等が、前後して割腹したてん末など、愈々候をして愁嘆させる種となつた。

しかしこの記述にもまったく根拠がない。

さらに『岐阜県治水史』は「第二期工事準備期間の犠牲者」という節を設けている⁽⁶⁵⁾。この期間中薩摩藩は陸上の工事の外、材木の伐採搬出、石材の輸送など次期工事の準備に当たっていた。そして『岐阜県治水史』は、「この間幾多の支障が続出して、事業の進捗が思うようにできず、加うるに夏期出水は頻々とあつて、既成工事の破壊せられるものが多く、その上幕吏の督責が急で、ために悲憤切齒、責を引いて屠腹し、罪を藩主に謝するものが続出し、その数は実に三十六名の多きに上つた」と書いている。そして三十六名の自刃日と姓名を列挙した。しかし自刃の理由やなぜこうした人たちが自刃なのか、その自刃日を含めまったく説明はない。「この中には、或は自己の分担した工事蹉跌の責を負うて自刃したものもある。或は幕吏の冷酷な仕打に憤慨し、武士の一分が立たず、悲憤切齒して割腹したものもある。洵に悲壯の極と謂うべきである。但しこれ等の人々個々の屠腹原因事情等については、今日これを明らかにし得ないのは、洵に遺憾に堪えない」と書くのである。

「第二期工事中の犠牲者」という節では、八ヵ月間の十四名の自刃者のリストを上げている⁽⁶⁶⁾。ここでは準備期間中に三十六名の自刃者を出したことに比較して、「察するに平田総奉行等の上役より、懇々その配下に訓諭するところがあつたのによるものではあるまいか」と推測している。

そして最後に『岐阜県治水史』は「平田総奉行の最期と藩主の卒去」、「義没者とその菩提寺」という節を設けた⁽⁶⁷⁾。平田の自刃については次のように述べている。

平田総奉行は一まず一年有半にわたる薰行を終れるものの、この

間五十三名の自殺者（薩州藩士は五十一名）と、三十三名の病死者とを出したこと、あるいは工事が幾度か蹉跎して、ために工費を増加させたことなど、既往を回想して、いまさら総奉行たる責任の重大なるを痛感し、潔く割腹して罪を君侯に謝すべく決心した。（中略）二十五日曉天、任地大牧村（現養老郡池辺村大字大牧）の役館において、東天に出初めた旭日を伏し拝み、西に向つて主家の隆昌を祈念しつつ、総べての責任を一身に負い、悲壮な最後をとげた

この書を貫く顕彰的志向が工事に關する叙述の最後にもっともよく表現されている。

結局のところ、この工事によつて自刃したとされた工事関係者は五十四名、病死者とされたのは三十三名であつた。自刃者のうち、高木家臣内藤十左衛門と幕府御小人目付竹中伝六は幕府関係者であり、また病死者一名は町人の工事請負人だと推測している⁽⁶⁸⁾。この三名を除くと、自刃者五十二名・病死者三十二名で、この数は現在墓石が確定されている数と一致する。

（2）自刃説の根拠

一八九三年に海蔵寺から一通の証文が発見された。これは宝暦治水工事関係史料の中でもっとも著名な史料の一つである。戦前からくり返し、宝暦治水を論じた著作に引用され続けてきた。結局のところ、自刃説の根拠はこの書簡にある。海蔵寺は平田鞠負などの墓があり、薩摩義士顕彰運動の主唱者の一人だった峠本慈船が住職であつた寺院である。この文書は、宝暦四年四月十六日薩摩藩士二宮四郎右衛門から桑名海蔵寺に宛てた書簡で、宝暦治水の第一次工事（宝暦四年二月二十七日から五月二十二日にかけての第一期応急工事）の犠牲者、永吉惣兵衛の葬儀を依頼した書簡である。この文書には「松平薩摩守家来永吉惣兵衛腰物にて致怪我相果候に付、於貴寺葬申度段」とあり、「腰物云々」は薩摩側が幕府を憚つて割腹した事実を隠すための文言で、わざと表現したのだと言われてきた。

この文書は宝暦治水碑の前での慰霊祭のとき、「義歿者腹切証文」

として、西村の文章を添えて配布された⁽⁶⁹⁾。西村は四十九名の自刃者と三十二名の病死者を出したこの大工事の忠誠義烈を表彰するとともに、この書が「瘞屍之徴証」（屍を埋葬した証拠）だと記している。三川分流工事の竣工式、宝暦治水碑の除幕式の席上での海蔵寺証文の配布は、歴史的な儀式を迎えているという高揚感もあつて、自刃が疑いもないような「史実」として人々の心に刻印されていたのではないかと考えられる。

こうした顕彰運動とは別に、薩摩義士の自刃説が、当時説得力をもつた大きな理由は、おそらく工事関係者、水行奉行高木新兵衛の家来・内藤十左衛門が実際に自刃したという事実にあつたと考えられる。彼の場合には『高木家文書』の中に史料が残っているため、戦前以来注目されてきた⁽⁷⁰⁾。『岐阜県治水史』はこの文書が自刃説を裏付ける「暗夜に一道の光明」を示すものと述べた⁽⁷¹⁾。

四十余名に上る薩摩藩士が、如何なる事情に余儀無くせられて、斯かる悲惨最期を遂ぐるに至つたか、僅に口碑に「申訳の爲め」と伝へて居るのみで、正確な記録が一として伝はつて居らぬことは、甚だ遺憾とする所であるが、茲に唯独り信すべき一人の割腹者の聞取書が伝へられて居ることは、暗夜に一道の光明を与へるものと謂ふべきである。

内藤十左衛門は二の手工事に配属され、鍋田川沿岸の中和泉新田築堤工事に従事していたが、工事監督不行届の理由で主人に累を及ぼさないために割腹した。四月二十二日内藤からの聞取書には、堤防工事の指示に横着者の庄屋が従わず、堤防工事が不十分となり、検分でそのことが指摘されたため、主人への処分を避けるために切腹すると書かれてあつた。

（3）自刃説の再検討

自明の前提として自刃説があるのだが、史料的な裏づけはない。そのことは西田の活動のなかでも確認され、伊藤信もその著作で述べている。自刃説に關しては記念碑建立以前から戦前通じて疑義がもたれ

おり、その証拠を集めるための努力もなされていた。しかし、病死では治水への政治的、社会的な関心を引いていくのにインパクトがないのであり、自刃は工事竣工のための人柱的な意味をもっている。自刃であつてこそ、その行動の道德的価値は高くなり、人々への感化力もそこから生まれてくる。こう考えられたとしても不思議ではない。しかも戦後になつても疑問符がもたれながらも、自刃説の再検討はなされなかった。

ここでは自刃説を論証するような史料は存在しないことを前提に、薩摩藩士たちの死の原因は病死であつたという仮説を提示したいと思う。

(ア) 薩摩藩士の姓名と死因

薩摩藩士たちの死をめぐってはいくつかの不可解な点がある。まずこのことから考えてみよう。

表4は現在確認されている薩摩藩士の墓所のある寺院と死者数及び死因である。常音寺を除いて、寺院・慰霊堂によって自刃と病死がはっきりと分かれている。病死者の墓石のあるのは天照寺と浄土三昧の慰霊堂（天

〈表4〉「薩摩義士」埋葬寺院一覧（現在確認されているもの）

寺院名	所在地	埋葬義士数	自刃・病死の内訳	
			自刃者数	病死者数
① 海蔵寺（曹洞宗）	桑名市北寺町	24	24	
② 長寿院（臨済宗）	〃 寺町	3	3	
③ 長禪寺（曹洞宗）	〃 東方	1		1
④ 常音寺（浄土真宗）	桑名郡多度町	5	1	4
⑤ 常栄寺（日蓮宗）	海津郡平田町	1	1	
⑥ 円成寺（曹洞宗）	〃 南濃町	13	13	
⑦ 天照寺（浄土宗）	養老郡養老町	3		3
⑧ 浄土三昧慰霊堂	〃	24		24
⑨ 心岩院（臨済宗）	安八郡輪之内町	1	1	
⑩ 江翁寺（臨済宗）	〃	6	6	
⑪ 少林寺（臨済宗）	羽島郡竹鼻町	1		1
⑫ 清江寺（曹洞宗）	羽島市江吉良	3	3	
⑬ 大黒寺（真言宗）	京都市伏見区	1	1	
		86(85)	53(52)	33

* 大黒寺墓碑は平田鞠負のもの（海蔵寺の平田墓碑と重複）

** 合計欄（ ）内が実数

照寺の管理）だけで、他の寺院はすべて自刃者の墓石をもつ。また身分的には、侍分は自刃、従者（仲間という身分の者、あるいは苗字のない者）は病死という傾向が強い。

ところで、犠牲者の姓名と死因が刻まれる予定だった宝暦治水碑の建立を前にして、姓名・死因の確認はどのようにして行われたのか。すでに述べたように、西田喜兵衛は死者について島津家へ照会しているが、これに加えて岐阜・三重両県下の寺院での墓石の確認作業を実施した。

しかし西田が依頼した島津家の調査で、死亡者の死因の確認はできなかった（後述）。西村は西田に対して死者の姓名・死因に正確を期すように要請した。自刃者の実績が明らかにしなければ、記念碑を建立する精神が失われるのだと、西村は認識していた。

実は薩摩藩士の死者の確認作業は、宝暦治水碑の建立直前まで混乱していた。一九〇〇年四月二十二日が記念碑の除幕式だったが、四月十日の岐阜県官吏豊田幾治郎が西田に宛てた書簡には、羽島郡江吉良村の清江寺近くの藪地から石塔三基が発見され、山田省三郎とともにそれらを集めて墓所を造り、保存を計画したと記していた⁽²⁸⁾。そして三名の名前を記念碑に追加して刻むように求めた。これを受けて西田は追加彫刻の件は了承したものの、彼らが確かに宝暦治水関係者だという確実な証拠を提示するように要請した。豊田は彼らが治水関係者と刻まれていること、死没したのがいずれも宝暦四年八月中であることを根拠にあげて、彼らを治水関係者だと述べた⁽²⁹⁾。しかし、彼らは自刃者として根拠は墓石にはないにもかかわらず、記念碑には自刃者として刻まれたのである。おそらく記念碑建立直前のあわただしい状況のなかで、姓名と死因の確認が行われたと推測される。

(イ) 病死説の根拠となる史料

考えてみれば、一年余の工事期間で八十五名に及ぶ自刃者・病死者が集中的に出れば、何らかの記録として残されていると考えるのが普通だろう。そして多数の自刃者が出れば、きわめて大きな政治問題になるのではないだろうか。高木家の家臣・内藤十左衛門が自刃したと

き、詳しい調査が実施された。死の原因を確定しておくことはもとより、家督相続にあたっても死因は重要な問題であったと考えられる。

当時の記録には内藤の自刃の報告書、病死者の記録は存在している。やはり残された史料から考えれば、病気によって薩摩藩士が死亡したと考えておくべきではないか。宝暦四年の病氣流行については、宝暦四年八月二十五日付の薩摩藩佐久間源太夫の幕府に宛てた上申書に明らかである⁽⁷⁴⁾。

然とも当分病人御座候二付、先達て申上置候水行御普請場所差出候小奉行三十二人之内、七人相煩、歩行士百六十四人之内、六十人相煩、足輕二百三十人之内、九十人相煩罷在候、来月中旬迄二は快氣仕体無御座、差支迷惑仕候、依之申上候、御普請御取掛り御座候ハ、五人差出候所えは三人、且又三人之所えは兩人も差出、手代り人数も御座候二付、兎哉角御間に合せ置、追々快氣仕次第、先達て申上置候人数之通罷出、相勤候様二可仕候（中略）其上当夏以来小奉行・歩行士・足輕等二は数十人病死仕候二付、国元より人数差越候様二申遣候得共、遠国故着仕候儀、暫延引可仕と奉存候

四百人を越える工事関係者の内、実に半数近くが病人であり、数十人が病死していた。このため鹿児島から補充のための人数を派遣するように要請していたのである。上述したように、一八九三年西田は上京して、島津家を訪問したが、家扶迫水久中は治水工事について記録を調査することを約束した。

十二月二十九日島津家記録掛平田宗高は西田に宝暦治水関係の書類を送付している。「島津家書付写」⁽⁷⁵⁾は西田が島津家との交渉で得たはじめての調査結果だった。その点で宝暦治水事業での犠牲者の内容を知ることができるきわめて重要な書類である。宝暦三年十二月に幕府から御手伝普請を命じられてから五年五月の工事検分に至るまでの経過を整理した書類である。この島津家書類は平田の死について、「正輔去歳在疾未復、今又病積聚在病褥、而尚視事五月二十四日欧血数々、二十五日死矣、即夜輿遺体至伏見、而葬大黒寺」と記されてあ

った⁽⁷⁶⁾。此は薩摩藩の公式の編年記録の記述であり、それは平田が病死した事実を明白に記しているのである。

この書類には平田の書状など原文書が引用されているが、そのなかに「石川正右衛門家所伝之古書」があり、「勒負殿急症差発被成死去候」と平田の病死がはっきりと書かれていた。この「急症」を自刃を隠すための表現だと解釈する必要はなく、当時の工事現場での病氣との関連は不明だが、平田自身も病氣であったと率直に理解した方が良さだろう。また「清水盛富年代記」では、「（宝暦四年）八、九月頃江戸芝屋敷熱病ニテ士以下足輕人足等二至ル迄凡死二百人二及候」と、江戸藩邸における熱病流行の記事があった。

『岐阜県治水史』も病死者が多く出たことを説明した「悲惨な病死者の続出」という節を設けている⁽⁷⁷⁾。濃尾地方は湿気が多く、不衛生の土地であったため、宝暦四年六～七月にかけて疾病が蔓延し、薩摩藩士からも病死者が続出した。そして次の史料を紹介している。

小屋小屋病人多く、病死の者も御座候由、病体皆々一様の儀に候様仰下され候（中略）遠国にて箇様の儀は、哀なる事計に御座候、何れ養生も懈怠勝、一つは養生にて助かり申すものも相果て申し、御普請もそろ／＼相初り候様に御座候や、末々見え申ざる儀にと御心労遊ばさるべく存じ奉り候

これは七月二十七日村上忠右衛門から薩摩藩大敷出張小屋の主人渡辺勘右衛門に宛てた書簡の一節であるという。これによると薩摩藩士は同じ原因で病死したようだが、養生が充分でなかったために助かった者も助からなかったと述べ、今後の普請において同様な事態が生じるかも知れないと憂慮されていたことがわかる。

この史料の後に、『岐阜県治水史』はすでに引用した八月二十五日付の佐久間源太夫上申書を引用した。この上申書で病死者は数十人になっているが、『岐阜県治水史』は墓碑と過去帳とによって三十三名の病死者の名前と死亡年月日をあげていた。

6 宝暦治水工事研究について

(1) 『岐阜県治水史』の顕彰的側面

『岐阜県治水史』は幕府治水関係文書、東西両高木家文書などによって、治水工事の経過を長大な史料をたびたび引用しながら書いている。しかもその叙述は史料に語らせるといふスタイルを取り、その史料解釈を簡潔に行いながら進む。そしてその叙述の間に、平田以下の薩摩藩士の顕彰の文章を差し挟んでいた。これが『岐阜県治水史』の特徴だった。島津重年・平田への「無限にして無垢真実な敬意と謝意」、「財政上の窮地に立ちながら、苟も一限隻句の哀訴歎願すら幕府に試みず、決然起ちて不屈不撓、藩命を全うした勇壮義烈の精神」、「(平田は多度社に参詣して)君命と幕命との下に一身を捧げて、治水の犠牲となるの真心を神靈に奉告」したことの指摘などが、薩摩藩士たちを「義士」として顕彰しようとした立場を示している(78)。

そして平田は赤穂義士の大石内蔵助と同様な立場だと考えられている。これは薩摩義士顕彰運動において、赤穂義士に匹敵する業績を上げたことを認知させようとした立場と重なっている。しかもその人格評価はきわめて高い。断片的史料による考察と断りながらも、平田は「温厚篤実」であり、「堅忍不拔の意志の人」だとした。

しかしながら『岐阜県治水史』がはじめて原史料を読み、分析し、近世から近代にかけての木曾三川流域の治水計画、治水体制、治水工事の歴史の変遷と問題点を子細に検討した、きわめてすぐれた研究書であることを否定することはできない。これが現在に至る治水史研究の基礎を作り、さまざま引用され、治水史の概観を得るための原点に存在する。

つまり『岐阜県治水史』の叙述は、史料に基づいた部分と顕彰運動の立場が混在している。史料を豊富に、しかも全文を読者に提供する形を貫く一方で、情緒的で、根拠薄弱なまま、顕彰運動で流布した「薩摩義士」像がこの書には反映しているのである。しかし、何よりもこの書がもつ顕彰的視点は再検討されなければならない。と同時に、宝暦治水工事に限っていえば、工事全体について全体的構図そのものを見直したうえで諸史料の分析が必要である。

(2) 『岐阜県史』の宝暦治水工事の評価

戦後刊行された『岐阜県史』は薩摩藩士の犠牲については、『岐阜県治水史』や伊藤信『宝暦治水と薩摩藩士』に譲り、治水工事自体に問題を限定している。つまり薩摩藩士の顕彰的側面からは距離を置いた形で叙述している。主として薩摩藩の負担問題に焦点を当てて叙述されている(79)。

『岐阜県史』は治水工事について、重い経済的負担、農民の請負、困難な資材調達などを挙げている。財政上の負担としては四十万両に達していたが、その内八〇%程度が人足賃金であったこと、工事が農民救済としての村請人足であったため、薩摩藩にとっては民政上の責任も負わされたこと、大量に必要であった石材の調達が地元各村の妨害によって困難であったことを指摘した。

工事の犠牲者は八十名を越え、その内五十余名が自刃したことを事実として認め、「一つの治水工事としては全く他に例を見ない異常な事態」が生まれ、「その工事の困難さと複雑な事情」と「治水ということの重要さ」を指摘した。そして「宝暦治水がいかに難事業であったか、またその完遂にはいかに多くの犠牲がはられたかをくりかえしおもうことが、犠牲者に対する、後生にいきるものなのによりの手意となるであろう」と、工事の犠牲者への敬意を表している。

多数の犠牲者が出た理由としては、幕府と薩摩藩との対立関係以上に、人足・資材調達の困難に見られる地元農民と役人との対立を考慮すべきだと述べている。そして高木家臣の内藤十左衛門の自刃事件をその例証とした。つまり記録は内藤の事件にのみ残されたが、こうした農民との対立に基づく問題は「各所にみられ」、「これだけの治水の難事業を多くの犠牲をはらってすすめながら、なおかつこうした地もと農民に反撥されることは、全く不本意であったにちがいない。その気持は、おそらく、みずから命をたつたひとびとにも共通のものであったであろう」と、薩摩藩士に同情を示していた。

確かに『岐阜県史』は宝暦四年の夏には病死者が増加したことも書いているが、平田の死については幕府の工事検分を国許に報告した直後、「遠く薩摩にのぞむ西方にむかつて自刃しはてた」と、顕彰本に似かよったフレーズで宝暦治水工事の叙述を終えている。

(3) 宝暦治水工事の構図と村請普請問題

幕府の厳しい仕打ちへの抗議・工事費増加への責任などが、多数の薩摩藩士が自刃した理由だと理解されてきた。また薩摩藩は幕府を憚って、その自刃という事実を隠してきたことが強調されてきた。それは幕府と薩摩藩との対立関係を中心に治水工事を考察することであった。しかし多数の自刃者を出したというこれまでの歴史像を見直すとき、工事体制に見られる対立の構図そのものも再検討する必要がある。宝暦治水工事は複雑な諸関係を内在させている。図2は宝暦治水工事に関係する諸要素とその関係を示したものである。工事負担をめぐる幕府と薩摩藩との関係、幕府・薩摩藩と農民との関係、工事計画・方法をめぐる村相互の利害関係、薩摩藩と請負町人・人足との関係（工事の町人請負問題）などといったさまざまな要素を全体的に評価しなければならぬ。

とりわけ最大の論点は治水工事の請負問題であると考えられる。この木曾三川下流域内に

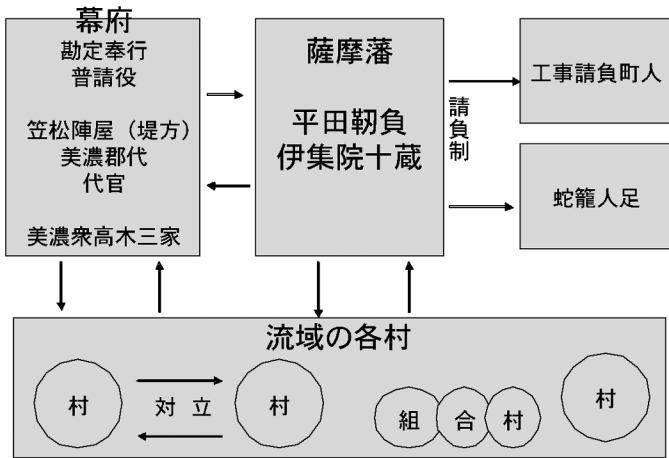


図2 宝暦治水工事関係図

は勿論賃銭共二御手伝方より相渡事二候」と回答し、村々からの人足を差し出させるための手配、人足への賃銭支払が薩摩藩に割り当てられた役割だった⁽⁸⁰⁾。それ故「御手伝方よりも役人多被差出候二不及、於場所人足員数見届并掛引之世話など致候役人有之候は、可相済儀二候」と、幕府は工事開始前に薩摩藩に指示していた⁽⁸¹⁾。

薩摩藩にとってこの村請問題は工事負担を考えたとき、切実なものであった。幕府から春の普請について意見を求められたとき、薩摩藩は工事に手間がかかりすぎること、見栄えを良くするために費用を多く掛けることを指摘し、薩摩の国元で同じ工事を行えば半分の費用で可能だろうと主張した。そしてこうした点を幕府の普請担当者に主張しても、取りあげない有り様で、強いて主張すれば状況が悪くなることもあると述べていた⁽⁸²⁾。確かに工事の負担をめぐる幕府と薩摩藩との対立は明白であった。

工事が長期化すれば農民へ支払うべき賃銭は増加する。この農民の賃銭問題については、次のような問題が生ずることが憂慮されていた。工事開始にあたり、幕府は薩摩藩に工事に際してさまざまな指示を出しているが、その一項目に「御普請所村請二吟味有之節、村方之者心得違、場所不相応之高直段等二て可請合旨申候ては、御普請差支二も相成候場所所有之候ハ、青木次郎九郎・吉田久左衛門・えも可被申談候」とあった⁽⁸³⁾。工事の村請のもとで、農民との間で賃銭をめぐる問題が発生することが危惧されていたのである⁽⁸⁴⁾。

薩摩藩は工事開始直後の宝暦四年三月には村請を中止して、薩摩藩が町人へ請負を命じたいと幕府に要求した⁽⁸⁵⁾。薩摩藩は膨大な量に達し、しかも上流の遠隔地からの採取が必要な石材の確保と「水中働人足」の請負の変更を求めた。すでに宝暦四年二月、勘定奉行一色周防守は薩摩藩に次のように指示していた⁽⁸⁶⁾。

御普請所之内、聖牛杵等水深之所え仕立候節、并羽口折懸ケ等之儀、不仕馴人足二ては難仕立場所も有之候ハ、其節は水中仕馴候大井川辺、又ハ関東筋大川通之人足相雇、頭取為致、村人足交替候て宜場所も有之候ハ、右之旨青木次郎九郎・吉田久左衛門え可被申談事

「聖牛」(ひじりうし)とは伝統的な水制工法の一つで、雑木を結んで棟木のようにし、その間に柵を作り蛇籠を何本も並べたものである(『日本国語大辞典』)。戦国時代の甲州に起源があり、急な流れを弱めるために使用された。こうした特殊技術を要する堤防具を作り、設置するためには、大井川や関東の大川の土木技術者を必要に応じて雇い入れることを幕府も認めていた。

しかし幕府が工事の町人請負へ変更することを拒絶した理由については、宝暦三年十二月一色周防守「御普請道法并仕立方之儀二付書付」⁽⁸⁷⁾に明らかである。

御普請之儀町人請負等二罷成候ては、兎角利潤を専一仕候二付、奉行附候て罷在候ても、自然と不丈夫可有御座候間、此度之目論見帳面之通ヲ以、其村之百姓共へ被仰付候得は、自分ノ之田畑囲之事二付、目論見通より余慶二仕候共、龜末之儀は一切不仕儀ニ御座候、尤村方莫大之御救ニ被成候儀ニ御座候間、右之趣御手伝方え被仰渡可然奉存候

幕府は村請による工事の利点として、自らの村の治水工事には計画以上の成果があること、賃金支払いが村方救助となることをあげていた。

薩摩藩の要請に対して、幕府は三月に石材確保については再評議を行い、また「水中働人足」については四箇所の工事箇所への投入を許し、「大井川・富士川辺人足等差加へ不申候てハ難成、尤水中ニ不限、籠作り・石詰等も右人足差加へ不申候てハ、出来形不宜旨、御普請役共も申之候」と、幕府普請役人も水中作業はもとより蛇籠作りや石詰め作業も大井川・富士川周辺の専門的土木技術者を加える必要を認めていた⁽⁸⁸⁾。つまり、村請で雇用される農民では対応できない、専門的治水技術に精通した職人を投入することがこの宝暦治水工事には必要であった⁽⁸⁹⁾。

さらに薩摩藩は四月二十四日難工事箇所の「水中働人足」の「外請負」を願い、六月五日にも秋に開始される工事について、難工事の場所三十八カ所を薩摩藩から他に請け負わせることを幕府に求めた。七

月一日青木・吉田から難工事の場所の内六カ所の水上・水下の普請(水上普請とは水際より上の堤防築き工事、水下普請とは石を水中に沈める水中作業をいう)について、薩摩藩から「外受負」に申し付けるよう江戸から指示が来たことを伝達された⁽⁹⁰⁾。そしてこれ以外に、青木・吉田は次の点を薩摩藩に指示したのである。①普請に使用する杵の材木と竹は幕府の費用負担で、村より納付されること、②六カ所の蛇籠製造については、薩摩藩が遠江国の者へ請負人を申し付けること、③その他の普請場に必要なる蛇籠については、村方請け普請なので、籠造りも村方で行わせること、④杵槌製作については、幕府の費用で入札にて請負人に命ずること、⑤杵槌を据え付ける作業人足は薩摩藩の手配で担当する村方を決定すること、であった。

しかし薩摩藩側はなおも青木・吉田に対して、三十二カ所の工事箇所も大工事であるから村請では早期の完成は不安で、外請けにするように要望したが、「定式普請とは相替組合村々被仰付、御普請仕立候間、滞有之間敷」として受け入れられなかった。このように薩摩藩が村請負に反対したのは、春の工事の経験と反省からだった。農民が工事について種々申立を行うため、工事が遅延したことを理由に挙げていた。幕府がいう定式の一村限り請負普請とは異なり、組合村々請負だから工事は円滑に進むという主張を薩摩側は受け入れられない経験をもっていた。おそらく薩摩藩は村との請負をめぐる折衝のなかで、人足の差し出しや賃金などをめぐって、農民のさまざまな要求が工事の実施に障碍を及ぼしたという経験があったと推測される。

宝暦治水工事は木曾三川下流域全体に広がる工事区域をもっていたが、その工事も大規模な洗堰工事や締切工事などを多様な方法をとる必要があった。そしてこの工事は村からの利害に基づく請願が背景にあり⁽⁹¹⁾、また七郷輪中堀割工事計画(七郷輪中に新たな堀割を実施し、揖斐川の河流を分流する工事計画)が中止されることが典型的に示すように、工事着手以降も計画を修正しつつ進められていった。そこには堀割の利害をめぐる輪中村落相互の対立に加えて、薩摩藩の工事費用負担という利害(七郷輪中堀割中止は薩摩藩の負担を軽減する)が内在していた。すでに指摘したように、工事には村請では対応できないような専門的治水技術が必要な箇所もあり、幕府が目論んだお救

い普請という方針では到底実現できない要素を含んでいた。このように考えると、宝暦治水工事は多様な利害や工事方法・技術が交錯しつつ進められたのであり、利害関係を単純化することはもっとも避けなければならない。

むすびに

二十世紀を通ずる長い時間のなかで、油島を中心として「聖地」としての歴史的顕彰空間が生成されてきた。宝暦「薩摩義士」の治水工事への献身は、公教育において郷土の歴史の重要な要素として教えられ、また現在に至るまでこの空間では、治水関係者の多くの顕彰記念碑なども建立されている。さらに鹿児島と岐阜両県の「薩摩義士」を通じた交流が続けられている。こうした歴史的顕彰空間はおそらく全国的にも希有な存在ではないかと考えられる。治水遺蹟や功労者の顕彰記念碑、治水神社は全国に存在するけれども、それらは単独的であり、局地的であるのが一般的だろう。しかし、へ聖地へ油島を中心とした歴史空間はさまざまな要素を関連させつつ、鹿児島までを含みこんで広域的に存在している。なぜこうした広域的で、多様な要素によって構成される歴史的顕彰空間は生まれ、現在も揺るぎないような形で存在し続けているのだろうか。

この空間の形成を生み出したのは、ある意味で憑かれたように「薩摩義士」を表彰する精神だった。一八九九年十二月十日海蔵寺で執行された「薩摩工事義歿者追弔法会」において、野村政明岐阜県知事は「薩藩士平田君以下七十九義士ノ霊ヲ拝スルニ当リ、凜乎トシテ其軀ヲ輕シテ君命ヲ重シ、至難ヲ凌テ人民ヲ利スルノ義氣ニ感シ、恍乎トシテ其功成ルニ日ハ、是死ニ就クノ時タルヲ悲ミ、殆ト感慨ノ情ニ堪ヘサルモノアリ、義士ノ死ヤ真ニ悲ムヘシ、然レトモ其死ヤ、沿川夥多ノ民命ヲ濁流汎濫ノ裡ヨリ救ヒ、附近田圃ノ荒蕪埋没ヲ予防スルニ於テ大功アリ、夫此苦節アリ、然後此偉功アリ、此偉功アリテ然後義士ノ名声不朽ニ伝フ」⁽⁹²⁾と述べている。郷土を同じくする者の発言とはいえ、こうした言葉に表れている顕彰行為のエネルギーがここに溢れていた。

木曾三川下流域はいったん出水すれば、「怒流渦ヲ捲キ狂浪人目ヲ眩セシムルノ状況ヲ呈シ、沿川ノ輪中ハ比年水害ヲ被ラサルナク、所謂老幼飢ニ泣キ、壯者四散ノ止ムベカラザル状態」にあった⁽⁹³⁾。また「大小ノ河川ハ四圍ノ連山ヨリ発シテ域内ヲ横流シ、川二本支ナク水ニ流域ナク、縦横旁午自然ノ放注ニ一任セシヨリ、常ニ良田美壤ヲ蕩漾シ、春漲夏潦絶エズ、民命ヲ殞シ国害ヲ釀セシハ実ニ顕著ナル事蹟」であった⁽⁹⁴⁾。こうした水害にたえず見舞われてきたこの空間は、「古来心血ヲ集注セシ治水至難ノ遺蹟」(一九〇〇年四月招魂祭での田中貫道の祭文)であった。

デ・レーケは治水工事をこうした不時に暴威を示す自然との「戦争」だと見なした。自然との「戦争」に勝利することが治水という領域で必要だった。そして、その犠牲者は当時の功労者顕彰のための宗教システム・観念(靖国神社に象徴される)において、戦死者と同等な価値を有する産業振興のための功労者として表彰された。近代戦争体制を維持し、国民を兵士として、留守家族を銃後の支えとして動員していくために、靖国神社を中核として全国的な招魂社・戦争記念碑などによって支えられた宗教的顕彰システムが日清戦争後の十九世紀末には形成されつつあった。

こうした戦死者顕彰システムの形成と期を同じくして、デ・レーケの治水Ⅱ戦争論、「治水討死者」の招魂祭・記念碑建立が提起された。まさに困難なしかも広域的に利益をもたらす治水工事は戦争とその犠牲者に重ね合わせられ、その顕彰システムを模倣しつつ、「薩摩義士」の顕彰が力強く組織されたのだった。そしてそこには「薩摩義士」に敬意を表すべきだという家訓をもった名望家(西田)、木曾三川流域の「治水熱心家」(山田・金森)、全国的な治水指導者(西村)の連携が存在していた。この戦死者顕彰システムの存在と「薩摩義士」顕彰の多彩な担い手の存在があつて始めて、平田鞠負という神を中核とし、広域的に広がりをもつ「聖地」油島は創り出されていった。

宝暦治水碑の撰文に「則ち古の称する所の、死を以て事に勤め功德を民に加う者と謂うべし」というフレーズがあった。また十七世紀中期、陸奥国磐城郡の小川掘り割り工事を遂行した沢村勝為の功労を顕彰する「小川渠碑」(安政二年)は、「古之制礼也、功施於民則祀之、

以死勤事則祀之」という古代中国の礼制にしたがった行為だと意味づけていた。戦死者との対比という意識に加えて、民政に功績のあった人物を祀るという思想が、薩摩藩士の顕彰にも影響を与えていたことになる。

最後に、宝暦薩摩藩士顕彰運動に関連して、幕末から明治前期の地域社会を取りまく諸条件の変化について言及しておきたい。第一に、幕末から明治前期の水害の頻発状況を抜きにしては、宝暦薩摩義士の顕彰は考えられない。すでに指摘したように、王政復古後抜本的な治水事業が必要とされた時、その前提となったのは幕末維新期の水害の頻発であった。そして一八八〇年代から九〇年代半ばにかけて、大水害が流域に甚大な被害をもたらしていた⁽⁹⁶⁾。

本曾三川分流工事に着手されて以降、竣功を見るまでの間、岐阜県下では一八九三(明治二十六)年八月、一八九六年七月、同年九月三度にわたって大水害の被害を受けた。それぞれの死者は八十一人、四十九人、百五十八人、流出家屋は四百四十四戸、九百十九戸、三千七百三十八戸であり、決壊堤防間数は八万六千間余、六万間余、三万四千四百間余であった⁽⁹⁶⁾。こうした工事最中の洪水被害がどのような形で顕彰運動に影響を与えたのか、また薩摩藩士の自刃説の定着に影響があったのか、この点は検討すべき課題として残る。しかし、薩摩藩士の業績を初めて紹介した『治水雑誌』第一号が「西濃地方水害取調」という記事を載せて、天保元年(一八三〇)から明治二十二年(一八八九)まで六十年間の水害被害表(堤防破壊間数・被害反別・家屋流出・被害町村・死者・復旧工事費など)を掲載したのは、三川分流工事の必要を主張すると同時に、その先駆としての宝暦治水工事を評価することにつながったのだろう。

連続して起きた洪水被害の切実さ、しかも大きな被害をもたらしたことが、現実に行進している工事の竣功への期待と、過去のきわめて困難だと宣伝されていた薩摩藩の工事に対して、同情と敬意が地域住民の間に生まれたと推測してもあながち間違っていないだろう。

第二の諸条件の変化は、ちょうど水害被害が頻発していた時期の土水費負担問題である。つまり治水のために誰が、どのような形で費用を負担すべきかという問題であった。一八七九年十一月西濃各郡有志

が作成した「美濃国水理改修懇請願書」⁽⁹⁷⁾は、大規模な河川改修工事の早期施行とその費用の官民分担について論じたものだが、そのなかで近世における治水事業は基本的には幕府・大名の負担であったことを強調していた。「堤防ニ由テ領地ヲ改良シ貢租ヲ増進セシメ、其増進ノ貢租ヲ収入セラルルヲ以テ、其土工及ヒ維持ノ経費ハ官ノ義務トセラレシモノニシテ、之レ領主統ノ其被害、地質ノ改良シタル領民ヘ対シ封建時世ノ慣例タリ」と、領主負担による治水管理の根拠を主張していた。このような租税徴収の権限と治水管理の義務という関係性は、明治政府のもとでも継承されるべき原則だと、この請願書は論じていた。

しかし実際には王政復古後、治水工事における官費支出は減少していた。一八八〇年十一月五日太政官布告第四十八号は、「地方税ヲ以テ支弁スヘキ府県土木(即チ河港・道路・堤防・橋梁建築修繕)費中、官費下渡金ハ来ル十四年度ヨリ廃止トス」と、府県土木費への官費下り渡しは廃止されてしまったのである。まさに「美濃国水理改修懇請願書」が主張の論拠とした官の租税徴収と治水管理責任との関係性は崩れていた。

治水工事は多大な財政的、人的負担が伴うし、村落間の深刻で、微妙な利害の調整が必要となる。広域的で、かつ大工事であればなおいっそう、そうした調整が難しいことは容易に推測することができる。水との「戦争」はこうした諸問題がある故に難しいし、とくに、人的負担が伴う。近世から近代への過渡期で治水体制がいまだ確立されていなかった時代の条件もあった。そうしたなかで劇的な形式で治水事業の切迫性を主張する必要があるときに、「薩摩義士」の業績が見いだされたと言えよう。

「薩摩義士」は輪中協同体の結集力を維持していくためのシンボルだった。『治水雑誌』を刊行した山田省三郎は、一八七九(明治十二年)に治水共同社を結成している。それは輪中協同体の組織化を図ったもので、山田はその輪中協同体の指導者であった。こうした治水協同体は「同胞相愛スル一郡ノ交誼心ト流域共同ノ義務心」⁽⁹⁸⁾によって存立することができる。水利の利害関係者全体に対して、こうした「交誼心」と「共同ノ義務心」を常に喚起し続けることが必要であり、

そのシンボルとして歴史的な治水功労者の存在、神格化された存在が欠かせないものとなった。

またこの治水協同体は、過去から現在そして未来をふくめて治水に關しての協同性があるという意味を含んでいた。宝曆治水碑の除幕式で、「治水ノ如キ事ノ永遠ノ利害ニ關スルモノニ至リテハ、一朝一夕ノ能ク功ヲ収ムヘキ所ニアラス、本工事ノ如キ実ニ前後百五十年ノ間焦心苦慮ノ結果、漸ク今日ノ成功ヲ見ルヲ得タル」⁽⁹⁸⁾と、松方蔵相は祝詞を述べた。現在の分流水工の成功は過去の功績を繼承して獲得されたのであり、治水事業は過去の事業の蓄積にたつて将来に向けての持続性が必要だという考え方をそれは意味していた。

宝曆治水碑の除幕式以後、記念碑や海蔵寺など三川流域では、たびたび仏教教団や個人が主催する追吊法会が執り行われた。その一つが一九〇一年十月三十一日の浄土宗金戒光明寺派による宝曆治水碑前での追吊法会があった。この時布教師川合梁定は「心内ノ記念碑」と題した演説を行っている⁽¹⁰⁰⁾。川合は記念碑建立に満足することなく、「諸君ノ心中ニモ尚巨大ナル記念碑」を建てることこそ其の追悼とすることを力説した。「心内ノ記念碑」とは「義歿者ノ心ヲ以テ諸君ノ心トスル」ことだと川合は言う。「心を以て心とする」ことは、義歿者の「義ヲ慕ヒ其恩ニ感ズル」こと、国民利福をはかる意思を受け継ぐことだった。こうした思想が治水協同体を支えていた。そして治水協同体は「薩摩義士」のような神話と平田鞠負という「神」を生成したのである⁽¹⁰¹⁾。

- (1) 『続編島津氏世録正統系図』『岐阜県史』史料編近世五、岐阜県、一九六九年、二二一―二二三頁。
- (2) 『岐阜県史』通史編近世下、岐阜県、一九七二年、一八三頁。
- (3) 最近の論考としては、秋山晶則「災害と地域社会の対応―寛保期における木曾三川流域調査」、伊藤安男「木曾三川の治水とその問題点」(いずれも溝口常俊・高橋誠編『自然再生と地域環境史』名古屋大学環境学研究科、二〇〇五年所収)が、新たな研究方向を探っている。
- (4) この顕彰運動については、先に少し検討したことがある(羽賀祥二「治水の神の誕生―『宝曆薩摩義士』と木曾三川流域―」『歴史学研究』七四二、二〇〇〇年)。

- (5) 西田喜兵衛編・発行『濃尾勢三大川宝曆治水誌』下、一九〇七年、六一―六二丁。
- (6) 山田貞策『宝曆治水薩摩義士事蹟概要』薩摩義士顕彰会、一九三二年、一九二―一九四頁。
- (7) 同右書一九五―二〇四頁。
- (8) 名古屋大学附属図書館研究開発室の秋山晶則氏のご教示による。
- (9) 磯貝勝「西濃巡回日記」西田喜兵衛編・発行『濃尾勢三大川宝曆治水誌』下、一九〇七年、三一―四三丁。
- (10) 『岐阜県治水史』下巻、岐阜県、一九五三年、四一六頁。
- (11) 明治二年八月の民部省宛笠松県伺書によれば、河流の妨げとなっている海口部の新田について、「安政之地震海嘯ニテ、尾勢海口之新田数邸漂没致候ヨリ、海口殊更壅塞河道之水行自由ヲ妨候」と指摘しており、安政二年(一八五五)十二月二十四日の安政地震による津波が新田を埋没させたことが、水流阻害の一因だと捉えられていた(『岐阜県治水史』下巻、六頁)。一八九一(明治二十四)年十月二十八日の濃尾震災が木曾三川改修工事に与えた影響もあり、十九世紀後期の地震と治水の両問題は相関連させて考察されるべきだろう。
- (12) 一九二〇(大正九)年十一月岐阜県西濃各輪中水利組合が組織した治水会は、幕末維新期の水害状況にふれ、「万延元年之三大川大破堤、慶応元年ノ大水害等アリ、明治二入リテヨリハ一層被害ノ度ヲ増加シ、元年・三年・八年・九年・十年・十四年ノ各洪水」が起き、その後も一八九六年九月の「前代未聞の惨事」まで連続的な水害に襲われてきたことを指摘した(『岐阜県治水史』下巻、五六〇―五六一頁)。
- (13) 『岐阜県治水史』下巻、一九六頁。
- (14) 『デ・レーケとその業績』建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所、年、一二七―一三〇、一四九―一五六頁。
- (15) 『岐阜県治水史』下巻、一九六―二〇二頁。
- (16) この間の経過については、『岐阜県史』通史編近代上、岐阜県、一九六七年、七六七―七七九頁を参照。
- (17) 『治水雑誌』第五号(一八九一年六月)、三三―三四頁。なお、『治水雑誌』については、農業土木学会古典復刻委員会編『農業土木古典選集』八巻(日本経済評論社、一九八九年)に所収されている復刻本を利用した。
- (18) 同右第十一号(一八九二年九月)二十四、二七頁。
- (19) 『治水雑誌』第五号、一七頁。
- (20) これ以前の慰霊活動については、一八九八年九月山田省三郎らによる海津郡高須町円心寺での十七日間の追吊法会、一八九九年十二月十日金森吉次郎による桑名町海蔵寺での追吊法会があった(『濃尾勢三大川宝曆治水誌』下、

五二丁。

- (21) 建碑式については、同右書一―一二丁。
- (22) 羽賀祥二「戦病死者の葬送と招魂―日清戦争を例として―」『名古屋大学文学部研究論集』史学四十六、二〇〇〇年。
- (23) 「大分県広瀬高瀬両水路工事熱心家南一郎平氏経歴始末」『治水雜誌』第四号（一八九一年四月）三〇―三一頁。
- (24) 後述する『治水雜誌』第一号「油島メ切工事二関スル経歴始末」のなかに、自刃した薩摩藩士の墳墓が各地に存在するという記述に続いて、「油島ニモ小祠ヲ建立セリ」とあり、宝暦治水工事の後建立された祠であるかもしれない。
- (25) 「碑文をたずねて」岐阜県歴史資料館、一九九四年、五七―六〇頁。
- (26) 平田への贈位の請願運動、鹿兒島などへの積極的な宣伝活動などには岩田徳義の活発な動きがあったことを見落とすことはできない。この点については、『宝暦治水工事薩摩義士録』（麻布学館、一九九二年）、『宝暦治水工事薩摩義士殉節録』（一九九二年）、『宝暦治水工事薩摩義士表彰』（教育奨励会、一九一三年）、『実録薩摩義士』（麻布学館、一九一七年）など、一連の岩田の著作に詳しい。
- (27) 『宝暦治水薩摩義士事蹟概要』一五七―一五九頁、「薩摩義士の事績を国定教科書に採録の請願」『大日本帝国議会誌』大日本帝国議会誌刊行会、一九三〇年、一四〇四頁。
- (28) 『宝暦治水薩摩義士事蹟概要』一五三―一五四頁。
- (29) 同右書一六九―一七四頁。
- (30) 同右書一八六―一八七頁。
- (31) 『養老町史』通史編下巻、養老町、一九七八年、九九二頁。
- (32) 『宝暦治水薩摩義士之墓所改造趣意書』石津村仏教会、一九二五年、岐阜県図書館所蔵。
- (33) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』下、跋文。
- (34) 『宝暦治水薩摩義士事蹟概要』二二―一頁。
- (35) 「治水協会要旨」『治水雜誌』第一号、一八九〇年十二月。なお『治水雜誌』については、宮村忠・石崎正和「今日なお示唆に富む明治前期の治水論」（農業土木古典選集八巻所載）を参照。
- (36) 『治水雜誌』第十二号（一八九四年六月）三九―四〇頁。
- (37) 同右第十二号（一八九二年六月）一―六頁。
- (38) 岐阜公園内に山田省三郎の顕彰碑（「山田省三郎碑」）がある。その撰文は次の通りである（前掲「碑文をたずねて」一七〇頁）。「治水翁山田君、名省三郎、稲葉郡佐波村人、夙憂郷国屢圯于水、為起治水共同社、拮据經營、百折不撓、若夫三川分流成工、亦君奔走之力居多焉、以輿望為県會議員、衆議院議員、敘正六位、賜藍綬褒章、及老病、各輪中贈以養老田、君既歿有志与

各輪中、胥謀鑄銅肖君、以旌盛德於不朽云」

- (39) 『治水雜誌』第十一号（一八九二年九月）二四―二六頁。
- (40) 一八八九年一月「治水共同社改良拡張主意書」『岐阜県治水史資料網文』五、名古屋大学文学部所蔵。
- (41) 西村捨三「治水汎論」一八九〇年、一九頁。
- (42) 『養老田趣意書』一―五頁。
- (43) 「治水協会要旨」『治水雜誌』第一号所収。
- (44) 同右第五号、一七頁。
- (45) 同右第一号、一八―二二頁。
- (46) その内容は、薩摩藩による工事の顛末、島津家との交渉による関係資料の調査、平田鞠負の墓の考証、記念碑建立のための活動、岐阜・三重両県での薩摩藩士の墓の調査、記念祭の執行などである。
- (47) 「西田芝寿事蹟調査書」（一九二三年三月二十日）多度尋常高等小学校編『郷土教育資料』一（三重県立図書館所蔵複写資料）。その後、一八九九年桑名郡会議員、一九〇三年桑名郡会議長を務めた。こうした地方行政への関わりその他、西田は地方名望家として、一八九六年水害被害復旧、七十六銀行支店の開設、電話局設置、多度神社の国幣大社昇格運動、養老線の開設、美濃街道拡幅、電燈架設など、さまざまな事業に私財を投じながら指導的な活動を行った。
- (48) 多度尋常高等小学校編『郷土教育資料』二（三重県立図書館所蔵複写資料）。なお、西田が多度神社の昇格運動に指導的な役割を果たしたことについては、『多度町史』資料編三、多度町、三一―三三頁参照。
- (49) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』上、五一丁。
- (50) 前掲『郷土教育資料』二、『多度町史』多度町教育委員会、一九六三年、二一七頁。
- (51) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』上、五〇―六八丁。
- (52) 一八九四年十一月十五日の西田に宛てた時本依頼状によれば、今後一切建碑事業には関係しないこと、供養堂建立のために寄附金の一部を分与されたい旨が記されていた。
- (53) 記念碑建設費は最終的には三一四四円五二銭で、この内寄附金は二、四二〇円六二銭、西田は寄附金不足のために六八八円三〇銭を負担した。金銭的にも西田なくては実現できなかった事業だった。
- (54) 以下、西村との関係については『濃尾勢三大川宝暦治水誌』上、六八―八六丁。一八九九年八月二十九日西村は大垣の金森吉次郎への書簡で、「明年ハ三川分流工事成功、成功式山県元帥出張申談置候、其節油島ニテ該関係死亡者招魂祭施行之心算」である旨を伝えている（『薩摩工事義歿者吊祭私録』金森吉次郎、一九〇〇年、六頁）。

(55) 金森は一八九九年十二月十日桑名海蔵寺において薩摩藩士の追吊法会を執行している。その経過は『薩摩工事義歿者吊祭私録』に詳しい。一九一九年十一月京都大黒寺に建立された「薩摩義士碑」には、「伊勢の国の人西田芝寿深く之を憾みとし、濃州大垣の金森吉次郎と共に之が表彰に努め、次で岩田徳義熱心に奔走し、事遂に天聴に達し、大正五年十二月廿八日畏くも従五位を追贈せらる」とあり、西田・金森・岩田の三人が顕彰運動に貢献したと評価した(『宝暦治水薩摩義士事蹟概要』一九四頁)。金森の顕彰運動の背景には、大樽川洗堰工事が行われた安八郡楡保村近くの御寿村、西松三郎の動きもあった。西松は一八九八年八月薩摩堰に関する著作をもちたらし、また楡保村江翁寺や大樽村心岩寺に薩摩藩士の墳墓がある事を告げると同時に、工事記念碑を建立する意思を金森に告げた。金森はこのことを西村に知らせるとともに、金森が追吊法会を計画することになった(『薩摩工事義歿者吊祭私録』一一―一二頁)。金森の理解によれば、宝暦治水碑の建立は桑名中心の顕彰運動と薩摩堰での顕彰運動を自身が繋ぐ役割を果たした結果だということになる。

- (56) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』下、五五―五八丁。
(57) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』上、八四―八五丁。
(58) 同右書八五―八六丁。
(59) 同右書九七―一〇三丁。
(60) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』下、二四―二五丁。
(61) 以上、編さんから出版に至る経過については、森義一「緒言」(『岐阜県治水史』上巻、岐阜県、一九五三年)による。
(62) 『岐阜県治水史』上、五〇〇頁。
(63) 同右書五三七―五四〇頁。
(64) 同右書五五八頁。
(65) 同右書六〇一―六〇四頁。
(66) 同右書六二八―六三一頁。
(67) 同右書六七〇―六七二、六八七―六九六頁。
(68) 同右書六〇七頁。
(69) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』下、九、五一丁。
(70) 最新の内藤の自刃に関する研究としては、伊藤孝幸「内藤十左衛門切腹一件の処理における公的文書の性格」『名古屋大学古川総合資料館報告』第七号、一九九一年、がある。
(71) 内藤十左衛門(高木家家臣)の自殺顛末については、『岐阜県治水史』上、五四―五五頁。
(72) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』上、一〇〇丁。
(73) 同右書一〇一―一〇三丁。
(74) 『蒼海記』『岐阜県史』史料編近世五、岐阜県、一九六九年、四三四―四三

五頁。

- (75) 『濃尾勢三大川宝暦治水誌』上、二七―三四丁。
(76) この書類は「続編島津家世録正統系図」から抜粋したものだったと思われる。『続編島津家世録正統系図』には同文を確認できる。

- (77) 『岐阜県治水史』上、六〇四―六〇七頁。
(78) 同右書五一―五二、五一―五八頁。
(79) 『岐阜県史』通史編近世下、一八三―一九五頁。
(80) 『続編島津氏世録正統系図』二一八頁。
(81) 同右二二四頁。
(82) 同右三三四頁。
(83) 同右二二五頁。
(84) 宝暦四年二月の流域五十八カ村からの願書によれば、川通普請の人足賃金は一人当たり銀三匁五分、居村普請のそれは一人当たり二匁五分で受けたいというものであったが、実際の請書では居村普請の場合には川通普請もふくめて、一人当たり一匁七分、他村普請のときには一人当たり二匁であった(『岐阜県治水史』上、五三三頁)。

- (85) 『蒼海記』『岐阜県史』史料編近世五、岐阜県、一九六九年、三二〇、三二四―三二五、三三三頁。
(86) 『続編島津氏世録正統系図』二二九頁。
(87) 『御手伝普請堤方御用留』『岐阜県史』史料編近世五、二八九―二九〇頁。
(88) 『蒼海記』三三二頁。この専門的治水技術をもつ職人の投入については、薩摩藩が雇用するか、または村方が相対で雇用するか、その方法については協議が必要だという判断であった。
(89) 実際に、蛇籠の製作方法や石の詰め方については、幕府・薩摩藩・農民に間に議論があった。この点については「蒼海記」三四―三四二頁。
(90) 宝暦四年七月二十二日「国元家老義岡相馬・同鎌田典膳宛平田頼負書簡」『続編島津氏世録正統系図』一三四―一三六頁。八月になって薩摩藩は難場六カ所の普請を、江戸・駿府・伊勢の町人に請け負わせた(『岐阜県治水史』上、五九〇―五九四頁)。
(91) 秋山前掲論文。
(92) 『薩摩工事義歿者吊祭私録』六三―六四頁。
(93) 西田喜兵衛「治水致命記念碑建設要旨」『濃尾勢三大川宝暦治水誌』下、五五丁。
(94) 金森吉次郎「薩摩工事義歿者吊祭趣意書」『薩摩工事義歿者吊祭私録』三六一―四一頁。
(95) 水害状況については、『岐阜県治水史』下巻、五六〇―五六二頁。
(96) 『岐阜県治水史』下巻による。
(97) 『岐阜県治水史』下巻、一九六―二〇二頁。

- (98) 「西蒲原郡治水起工議」『治水雜誌』第五号（一八九一年六月）。
(99) 『濃尾勢三天川宝曆治水誌』下、四丁。
(100) 同右書七〇―七三丁。
(101) こうした困難で、多数の人々に利益をもたらす治水事業が、その実践者の神格化と事績についての神話を生み出すことについては、十九世紀初頭の尾

張藩による新川開鑿の神話と、その責任者の水野士淳の神格化に典型的に見られる。この点については、羽賀祥二「治山・治水をめぐる歴史文化―名所図会と地域環境史研究―」『名古屋大学文学部研究論集』史学五一（二〇〇六年三月刊行予定）を参照されたい。